クラッシュ！！

リポビタンO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クラッシュ！！

【Ｎコード】
Ｎ０４７５Ｗ

【作者名】
リポビタンＯ

【あらすじ】
この話は異常に腕っ節が強い男が血の繋がらない弟や妹、いつか出会う大切な人のために体を張る物語です。
時に馬鹿らしく、時に真面目に生きる男の生き様を見ていただいたら幸いです。

異世界転移（確定！！）　強キャラ（みたいです）

序章　第1節（前書き）

作者は某理想郷でも二次創作を書いております。　その作品と書き方が少し異なるため読みにくいところがあるかもしれませんが……

よろしくお願いします。

序章　第1節

「人類は最盛を迎えた」

昔テレビのコメンテーターがそんなことを熱弁していた。

それまで難しかった光エネルギー確保の高効率化、それの活用の成功により人類の技術力は様々な方面において格段に進歩した。

その進歩は各研究機関、企業に大きな恩恵を与えることになり、昔は空想でしかなかった車輪のない車や荷物を収納できるカプセル、人の身体能力を数倍に高めるスーツ等が現実のものとなったのだ。

勿論、悪用する輩なども一気に増えたのだが――　それらを取り締まる機関も発足されたため犯罪率はそこまで高くなったわけでなく、そのため日常において人々は大した変化を感じずに過ごしていた。

少なくとも俺、「高砂章太郎」の周りの生活ではそれが普通だったのだ……

業者が使うようなトラックが舗装された道を走っている。

そのトラックの運転席には二十代後半の男が座りハンドルを握っており、その隣のシートにはいかにも今年入社したと思われる男が座っていた。

「センパ～イ…　マジでいいんですか？」

年若い男…制服の真新しさから見て新人だろうが運転している男に向かい声をかける。

「何が？」

男は前方から目をはなさずに答える。

「何がってこの荷物ですよ…　工事用の資材って聞きましたけど」

「そのとおりだが？」

「いや俺が言いたいのはこれどうやって運ぶのかって事ですよ」

そうやって新人が後ろを向くと工事に使われる資材が所狭しとつまれている。

新人が疑問に思うのも仕方がない。

その資材は小さく袋に分けられているとはいえ一袋の大きさが大人が抱えても持て余すほどなのだ。

もちろん袋の中身が羽のように軽いものであるわけでもなく、一人では確実に腰をやられるという恐れがあるそんな重さなのである。

「俺らはスーツ使ったから別に大丈夫でしたけど…　今日もって来てないじゃないですか。　そもそもカプセルで収納すればトラックで来なくても済んだでしょう？　現場で積み降ろしするにもスーツのレンタル申請もしてないですし…大丈夫なんですかねぇ」

スーツ…　介護から建設、はたまた軍用にまでと様々な場面で活用される『多目的外装』の事である。人間の神経伝達の際に起こる微弱な電気をキャッチし、その部分の負担を軽くするというものだ。スーツといってもツナギの様に気軽に着れるものでありその使用方法も多種多様と汎用性が高く便利なものであり技術革命による恩恵の産物である、カプセルも同じく恩恵の一つでこちらはどんな物でも手のひらサイズに収納でき、重さも変わらないと言う一品のだが…　どちらも非常に高値な物であったのだ。

「ああ…　お前は初めてだっけなあそこに行くの」

新人のそんな問いに苦笑する先輩

「まぁ確かにスーツ無しじゃぁこの量を運ぶのはまず無理だな…だけどあそこは例外なんだよ」

「例外？」

「そう例外だ…　もうそろそろ着くぞ」

そういうと道路沿いの拓けた場所にトラックを入れて手ごろな場所で止まる。

先輩は車から降りると辺りを見回し

「大体あそこら辺にいると…　おお、いたいた」

砂利以外何もない所であったが隅を見るとビニールシートを被せら

れた木材らしき物が積まれている場所があった。

そしてその近くに黒のニッカボッカと白いタンクトップそれに地下足袋で身を包み、ヤンキー座りをしながらタバコを吸っている男がいた。

「おーい　章さーん」

先輩がその男に声をかける。

「章さん」とよばれた男は携帯灰皿でタバコを消しながら傍らに置いてあった上着を回収し、小走りでこちらに近づいてくる

背は低い、１６５に届くかどうか微妙なラインである。

体格も丸い…　全体的に丸いのだ。

おまけに手足が短く見える…　というか短い。

そのため一つ一つの動作がコミカルに見えてくる。

背格好だけを見れば小柄で小太りの男と言う印象に取れるが…

（へ！？）

男が近づくとそれが違う事がわかり驚愕する。

まるで大正時代の日本人を思わせる体系はまぁいい。

問題はその顔である。

黒髪を丸く刈り上げた頭に幾本かのラインが描かれており、もみ上げと一体化した顎鬚はきれいに整えられているのだが…　一般人にはない威圧感を感じる。そして、それに拍車をかけるのが濃い眉毛とサングラス、それに右の眉尻に小さいながらも存在する傷跡であった。

これはもうどこかのヤーさんにしか見えない。

（ちょっちょっと待った！？）

若い男は自身の先輩に対して疑問の声を投げたかったが…　当の本人達はなにやら二人で話し合っている。

こんな図を見ていると自分が持ってきた資材が実は白い薬でその商談をしているようにしか思えなくなってくる。

いつの間に、俺は犯罪の片棒を担がされたのだろうか？

自問自答しても答えは出てこない。

「ちょっと」

声をかけられたのを機に我に返って声の主に注目するのだが…　新人は後悔した。

自分のほど近い所に「章さん」の顔があったのだ。

何か粗相をしたのか？

だったらヤベぇって！

もしかして俺沈められる！？

つーか顔怖ぇ！

等と訳のわからない事を考えながら混乱する新人に困惑し「章さん」は「汗マーク」を浮かべながら先輩に向かい口を開く

「あ～これって…　僕の顔でビビちゃってますかねぇ？」

「みたいだな…　すまないな」

本当に申し訳なさそうに謝る先輩

「まぁ別に慣れてますしねぇ…　とりあえず挨拶したいんすけど？」

苦笑いを浮かべながら「章さん」がそういうと先輩は「わかった…」と言いながら新人の横まで歩き「いい加減に帰って来い！！」と渇を入れる。

「ひゃっひゃい！？」

新人は妙な奇声をあげる…　どう見てもテンパッていた。

「とりあえず落ち着け」

新人は先輩に話しかけられたためか幾分落ち着きを取り戻す。

すると新人は「章さん」に一礼してから先輩の腕を取りそそくさと

離れ耳打ちをする。

（ちょっと先輩）

（どうした）

（誰ですかあの人！？）

（誰って、　取引先の社員さんだよ。　上着を良く見ろ…）

チラリと見ると確かに上着には取引先の会社の名前が記されていた。

（……本当に社員？　暴力団の幹部じゃなくて？）

（幹部って…　本人には言うなよ？）

（やっぱし沈められたり！？）

（お前なぁ　むしろあの人はいい人だぞ？　見た目は怖いけどな。
それに…）

（それに？）

（章さんはああ見えてまだ２１だ）

本日二度目のショックだった。

いや…　いやいやいやいやいや！！？

ありえないっしょ！？

あんな貫禄のある顔と威圧感していて俺より年下なんて！？

俺の思考を読み取ったように先輩は溜息をつくと声をかける。

（まぁお前の思っている事は同感できるけどな本当だからな？　…あと年齢でからかうのは危険だからやるなよ）

（怖くてそんな事できませんよ…）

新人はいい人と自分より年下という部分に疑問を思いながらもチラリと当人を垣間見る。

「章さん」は所在無さげにその場に立っていた。すると「章さん」と少し目が合ったのだろう（サングラスでよくわからなかったが）後頭部に片手を回しペコペコと会釈する。

確かによく見れば良い人そうだ…　年齢は未だ信じられないが。

そう判断した新人は先輩に礼を言いながらその場を離れ「章さん」と対峙する。

「あー　すみません」

「別にいいっすよ」と笑いながら「章さん」は新人に話しかける。

「ども高砂章太郎（たかさごしょうたろう）っていいます」

こうしてやっと仕事が進むのであった。

…
…
…

話してみると高砂君はとてもいい奴だった。

顔の件も「気にしてないから別にいいっすよ」と笑いながら許してくれた……　が。

「まだ、これがあったんだった……」

トラック内にビッシリと積まれた資材が大量に残っていたのだ。

周りを見ても彼以外に大貫建設の人間の姿が見当たらない。

この量の荷物は一人でスーツの補助の無い生身の人間に運べるとは到底思えなかった。

俺は手伝おうと声をかけようとするのだが…

「まぁ見てろって」

先輩によって止められる。

「だけど先輩…」

抗議の声をあげようとすると高砂君はどこからか大八車を運んできて作業を開始しようとしているところだった。

頭に黒地に赤で何か書かれた手ぬぐいを巻き、軽く頬を叩きながら

気合を入れる。

そしてトラックの荷台に乗り込むと…

唖然

あまりの驚きに声が出なかった。

彼は両肩と首の後ろに資材を抱えながら危なげなくスイスイと積み替えているのだ。

確かあれって一個５０キロ以上あったような…

スーツを使ってもせいぜい三つが限度、それを彼は

「２５０キロぉ！？」

５個ほど抱えて運んでいるのだ。

それでも小走りにしているところからまだまだ余裕があるように見える。

「な？　俺の言ったとおりだろ例外だって」

「にしてもコレはすごいと言うかなんと言うか…」

「じきにお前もなれるって…　あっそうだ、まだ一つ例外なことが起きるんだよ」

「こっちはたまにだけどな」と笑う先輩

まだあんのかよと思いながら視線を戻すともう作業が終了してタバコを吸っている高砂君が其処にいた。

資材は合計３０個重さにすると１５００キロ

「１０分やそこらで終らせるなんてまじパネェ…」

笑いながら呟くしかなかった。

「いやぁ　お疲れさんでした」

高砂君いや章さんがこちらに話しかけてくる。

「えっああ　お疲れさんです。　…すごいんですね」

「ん　これっすか？　まぁ僕にはコレしかないんすよ」

そうやって笑いながら力瘤を作りながらパンと叩くと思い出したように

「あっそうだ」

と言うと真剣な顔をして先輩に振り向く

「今日何すけど…　多分あれがあるんで速く帰ったほうがいいですよ」

「あれって言うと…　また何かいちゃもんつけられたのかい？」

「まぁちょっとありましてね、今日は速く帰ったほうが」

とここまでいうとバイクやら車の音にかき消される。

章さんはあちゃ～という顔をしながら額に手を当てて天を仰いだ。

いつの間にか広場の周りはド派手な車やバイクに囲まれていた…

もちろん搭乗者はガラの悪そうなやつらばかりである。

よく見るとステッカーがはってありそこにはここいらで一番噂があるチームの名前が書かれていた。

噂というのは「薬物を売りさばいている」や「暴力団と関係がある」といったような悪いものばかりである。

一番高そうな車が入ってくると其処から包帯まみれのチャラい男が松葉杖をつきながら出てきた。

包帯まみれのためか見た目はあまり強そうに見えないが…　いい車に乗っていたという事はこのチームのトップだろうと思われる。

チャラ男はこちら性格には章さんを睨み付けると…

「ようやく見つけたぞ糞坊主！！」

と叫んだ。

「今回は一体何を？」

チャラ男が叫んでいるのをスルーして先輩が冷静に章さんに聞く…

って何でそんなに冷静なんですか！？

テンパル新人の心の声を無視するように章太郎は説明する。

「いやぁね　この前仕事帰りに街を歩いてたら、こいつらが一人をよってたかってリンチしていたんすよ。　話を盗み聞きすると「ヤクの売買すんの嫌だから抜ける」って言った奴をボコしてたみたいなんでね。一寸やりすぎじゃねって思って止めようとしたら逆に絡まれちまいましてねえ…　穏便に済ませようとしたんですけど埒があかなくて、殴られていた奴を助けて逃げようとしたら追い込まれちゃったんすよ。　仕方ないから其処にいた２０人を軽く撫ぜて帰ったんですけど…　あいつに制服に書いてあった会社の名前見られたみたいなんすよ」

ハハハと後頭部に片手をまわして笑う章太郎

…いや笑いどころじゃねえって！？

「てめぇ…　なに笑ってやがんだ！？」

こっちが話を全く聞いていないのが解ったのか男は激昂しながら怒鳴る。

それに対し章太郎は溜息をつきながら

「にしても…　よくこれだけ集めたなぁ」

「お前をぶっ殺すためだけに２００人集めてやったんだよ！」

「ったくよ～　普通不良の喧嘩って言ったらタイマンが普通だろ？

恥ずかしいと思わんのか？」

呆れながら諭そうとする章さんに対して「るっせぇ！」と杖を叩きつけながら怒り狂う男…　なんだろうかこの空気の違いは。

「今なら許してやるからよぉ　速く帰れや？」

この言葉が逆鱗に触れたのか男は包帯で隠れた顔を赤くしながら「おめぇらやっちまえ！」と叫んだ。

雪崩のように駆け込んでくるヤンキー達を見ると章さんは「仕方ねぇ」と呟くと

「迷惑駆けてすんません…　すぐ終りますんでトラックの中に隠れていてくれませんか？」

と言った。

俺は困惑しながらも先輩に連れられながらトラックに入り事の成り行きを見守ったのだった。

…

…

…

「死ねやぁぁぁ！！」

そう叫び厳つい男が木刀を振り上げながら突進してくる。

章太郎は腕を組みながらその場から一歩も動かない。

そして男の一撃が章太郎の頭に炸裂した。

力一杯の一撃だったのだろう当たると同時に木刀が折れたのだ…

常人なら即死また大怪我となるだろう。

事実男は手ごたえを感じ口を歪めたのだが…　すぐ驚愕で目を開く。

「イテェ」

それもそうだ自分なら血を流して昏倒する筈の一撃を章太郎は小石をぶつけられた程度の反応しかしないのだ。

「ウルァァァ！！」

今度は別の男が金属バットを振り上げて叩きつける…　しかしこの一撃にも章太郎はさっきと同じ反応しかしない。　それどころかバットの方がへこむくらいである。

以降も同じで殴られようが蹴られようが章太郎は一歩も動かない。

それどころか少し肌が赤くなった程度で怪我をしているようには見えない。

ようやくここでヤンキー達は気づいたのだ

「自分達はトンでもない化け物を相手にしているのでないか?」と…

攻めあぐんでいると一人がトラックに向かい走る。

後ろにいる奴等を人質に取ればいいのだと考えたのだ。

しかし

「それは」

手近にいるヤンキーに左手で軽くワンパンをいれ悶絶しているうちに片手で抱えると

「やらせんよぉ！！」

叫びながら投げる。

殴る・投げる・殴る・投げるを繰り返し人間砲弾を量産していった。

トラックに向かう奴がいなくなると今度は集団に対して砲撃が始まった。

結果…

「馬鹿な…」

包帯チャラ男が呟くそれもそうだ…　自分が用意した兵隊がものの数分で半数以上減らされているのだ。

しかも全員生きている。

呆然としていると、「おーい」と声をかけられた…　もちろんかけたのは章太郎だ。

「どうすんだぁまだやるかぁ！！　今ならお前がワビ入れれば許してやんよぉ！！」

男にしてみればそれは避けなくてはいけなかった２００人用意して一人に負けてワビを入れるなんて屈辱でしかない――　それどころかリーダーとしての面目が丸つぶれである。

男は屈辱に顔を歪めながらも何かを思い出したかのような顔になると…

「誰がてめぇなんぞに詫びなんぞ入れるか！　見てろやぁ！！」

と叫ぶと一際大きいトラックに杖をつきながら向かった。

「おいお前らの頭行っちまったけどいいのか？」

困惑しながら近くにいるヤンキーに話しかける章太郎。

するとヤンキーはビクッとしながらもすぐニヤりと笑みを浮かべてこう言った。

「あーあテメェ死んだぜ」

「はぁ？」

「あの人はなぁ、とある組の幹部の息子でよぉ…　よく組から色々と便利なもんを卸してもらってんだよ。んで今から出てくんのは最近おろしてもらったばかりの奴なんだよ…　てめぇも可愛そうな奴だな…　アレの犠牲者第一号なんだからなあ！！」

男は勝ち誇ったように話す

「取り合えずよぉ」

「ん？」

「あいつの親父の組の名前教えろや」

「何だぁ今更謝ってもおせぇかんな！！」

「別に」と呟くと章太郎は携帯を開きまずメールを打ち、終わったらすぐどこかに電話をかけて少し話して携帯をしまった。

「なんだぁ今更応援よんだのかぁ　残念だったな…　もう」

「遅ぇよ！！」と叫ぶと同時に包帯チャラ男が入った車が大きな音を立てて破壊されると其処には…

「ハッハー！　この軍用強化スーツでぶっ殺してやらぁ！！」

体を黒い強化スーツで固めながら包帯チャラ男がスピーカー越しに叫ぶ。

ザンザンと音を立てながらこちらに近づいてくる…　大きさ４メートル程だろうか章太郎の２倍以上の大きさである。

「何ちゅーもん出しやがんだよ…」

呆れながら呟く章太郎…　するともう男は眼前に来ていた。

「クックックよくもまぁコケにしてくれたなぁ…　ぶっ殺してや」

「あーちょっといいか？」

章太郎が話を遮る。

「ああん？」

「とりあえず一個聞きたいんだけど…　それ火器とか付いとんの？」

「そんなんなくてもよぉ…　てめぇをヤルにゃぁ十分だっつーんじゃぁ！！」

「そうかなら…」

章太郎は

「なんとかなるわなぁ！！」

不敵に笑った。

「なに笑ってんだよ！！」

癪に障ったのか包帯チャラ男はその右腕を章太郎に叩きつける。

軍用強化スーツは一般企業のものよりも運動性・操作性の強化が格段に上がっている…　そんなものを人間相手に使ったらどうなるか？　答えは即死である。

実際章太郎は弾き飛ばされ地面に横たわる…　すかさず包帯チャラ

男は強化された脚力を持って追撃に向かう。

「死ねぇ！　死ねぇ！　死ねやぁ！！」

叫びながら踏みつける・踏みつける・踏みつける。

ヤンキーの中には目をそむける物もいる。

当たり前だろうこんなにやられたら死体しか残らない、それも車に引かれたヒキガエルのようなスプラッターなやつだ。

「もう気が済むまでやらせるしかない」

その場にいたほとんどの人間がそう思っていただろう…　当事者以外はだ

「うおおおおおおおおお！！」

叫びながら包帯チャラ男はストンピングをやめない、というより様子がおかしい。

圧倒的優位にいるのにも関わらず男の顔には焦り…　いや恐怖が張り付いていた。

足の動きが止まる、男の気が済んだのか？

周囲の人間の視線は足元に集まる。

誰もが息を呑んだ…　どうしてか？

その理由は

「いてぇよ…」

すぐ判明した。

「こん畜生がぁぁ！！」

死んだと思っていた人間が立っていたからである。

所々汚れているが大した怪我がなさそうに男の足を掴んでいたのだ。

「次はこっちの番じゃぁ！！」

するとそのまま投げ飛ばす…

４メートルの巨体は弧を描き大きな音を立てて地面に叩きつけられる。

といっても男には大したダメージになっていない。

その証拠に男はすぐ体制を立て直す…　だがその顔には覇気はなくただただ青ざめていた。

章太郎との距離大股の歩数にして１０歩程、　そして章太郎は男に向かって駆け出す。

ここで男は勝機を見る…　章太郎のスピードがあまりにも遅かったのだ。

ドスン、ドスンという足音が章太郎の鈍足さをかもし出している。
その様子を見て「奴が俺に近づく前にカウンターを食らわす」のが男の思いついた勝機だった。
格闘技を学んでいたわけではないが今のこの体は大幅にスピードがアップしているのだ…　鈍足ともいえる章太郎の攻撃にあわせるのは簡単な事だと考えたのだ。
残り五歩のところまで章太郎が近づく…　シナリオのために迎撃の態勢をとる男。
しかし…　男のシナリオは採用されなかった。
「へ？」
消えたのだ。
どこに行ったのか解らない目だけを右に左に動かしても捕捉出来なかった。
白昼夢か？
そう考えていた男の腹に衝撃が走った
「ぐほぉ！？」
体が宙に浮かぶ
男は顔が青ざめさせながらも自分の腹部に目を向ける。

其処には…

「捕まえたぞおらぁぁ！！」

自分が見失った男がいた。

章太郎はそのまますかさず抱え上げてブリッジの要領で叩きつける…　いわゆるフロントスープレックスである。

「もういっちょぉぉ！！」

それだけで終るわけでもなく二転三転しながら叩きつけられ…

「どっせええええい！！」

投げられた。

いくら対ショック性能があっても度重なる衝撃と回転にスーツの装着主が脆弱では耐え切れるのかというと…

「うげぇぇぇ」

耐え切れなかった。

男は嘔吐しながらグッタリしている。

「ん～コレでも壊れんかぁ」

「やっぱり硬いか」と右腕をグルグル回しながら近づくと左手で男

の襟元を掴みスーツごと引き上げると耳元で喋る。

「最終忠告だ…　今すぐ其処から出ろや」

そういうと男は腕を引き抜き、足を引き抜きスーツから這い出る。

章太郎はそれを確認すると右の拳を固めて大きく弓なりに体を開き…

「がああああ！！」

咆哮と共に右の拳はオーバースローの軌跡を描きスーツに襲い掛かった。

ズンという重い音が響き渡る。

「なんじゃそりゃあああ！？」

チャラ男の驚愕に満ちた声が響き渡る。

周りの人間は何かと重い、右の拳によって大地に縫い付けられたスーツを見ると……

「「「「「はあああ！？」」」」」

そう叫んでも仕方ないだろう。拳はスーツを通して地面に穴を穿っていたのだ。

「んっしょっと」

右手についたそれをゴミのように捨てると章太郎は時間を確かめる。

「もうそろそろだな」

そういうと座り込む包帯チャラ男に向かい歩き出す。

もう顔色は青を通り越して紫になっている。

「やっやめろ！？くるな！！　おっ俺に手を出したらどうなるか解ってんだろうなぁ！？　親父がヤクザの親父が黙っていねぇぞ！！」

腰を抜かしているのか這い蹲りながら逃げるがすぐ追いつかれる。

そして男の前にしゃがみこむと……

「おい」

「ひぃぃぃ！？」

「お前の親父ってあれか？」

顎で視線を促した。

「へ？　あああ！！」

男の顔が希望に彩れる、其処には黒のリムジンから飛び出してきた中年の男がいた。

父の確認をしたのか包帯チャラ男は走って近づいていく。

「父さん！？　あいつ！　あいつぶっ殺して！！」

そう頼んでいるが父親は厳しい顔をしている

「あいつ俺にいや！　組に喧嘩売ったんだよ！？早く殺し」

「いきなり会長から連絡があったらと思ったら…馬鹿か貴様は！！」

「ひぃ！」

父親に怒鳴られそのまま尻餅をつく…

「なっなんで？」

「おまえ…　喧嘩を売っちゃなんねえ奴に喧嘩を売っちまったんだよ！！」

「どっどういう」

「組潰しを知らんとはいわせんぞ！！」

辺りに声が響き渡る。

組潰しという単語が出るとヤンキーの中でざわめきが走る。

「組潰しってあの？」

「そうだ…　あいつがあの組潰しだよ！！」

そういうと父親は、紫煙を吐き出す章太郎を指差す。

「生身でしかも単身で関西最大勢力のとあるヤクザを壊滅寸前まで追い込んだ化け物みたいな男それが…」

「あいつなんだよぉぉ！！」とまた指差す。

その光景をみた章太郎は立ち上がりながら近くまで歩く。

目の前で止まると暫く対峙するそして…

「んでこの状況どう落とし前つけんだ？」

章太郎が口を開いた。

「とりあえずもう警察は呼んであんだけど…　どうすんの？　まあそっちの頭と話すのもありだけどよぉ」

奴の携帯の中には様々な要人の番号が記録されているという。うちの会長と直通の番号を持っていてもおかしくないだろう。

章太郎の気迫に押されながら答える。

「息子はこのまま引き渡す」

チャラ男は「そんな！？」と悲痛な顔をして縋り付くが…　父親は振りほどく

「うるさい！　貴様のせいで俺の出世はもうなくなったと同じなんだよ！　貴様なんぞし」

知らんと言おうとするがプレッシャーによって飲み込む

「ちょぉまてや…」

その発生源を見ると手をポケットに入れてタバコを咥えながら怒気を発する章太郎がいた。

「そもそもてめぇがこいつに武器渡していたんが元凶だろうが…それに薬をばら撒いとったのもてめぇの組がやったことだろうが！！　それをよぉ息子せいにして自分は逃げるだぁ？」

手をポケットから出して父親の襟首を持ち上げる。

「おいゴラ…」

「なっなにを…」

周りの黒服を見回しても誰も動かない。　動けないのだ。

風を切る音に反応して前を向く、其処には自分の顔に目掛けて唸りを上げてくる

「テメェの子供のやらかした責任はテメェで取れや！！」

章太郎の額があった

「ごぶぉぉぉ！？」

鐘を突いたような音が響きわたり父親は額からシュウシュウと煙を上げながら気絶した。

と同時にファンファンとサイレンの音が響く。
父親を打ち捨てると章太郎はトラックに近づいて声をかける。
「いやぁスンませんご迷惑おかけしまして…」
「いやいいですよ…　章さん今回もやらかしましたねぇ」
「そー何すよぉ　はぁ、帰ったら社長になに言われるか…　」
ハハハと互いに笑いあう先輩と章太郎。
「とりあえず早く出ちゃってください…　後は僕の方で何とかしますんで」
「わかったよ…　んじゃ章さんまた今度」
「はい。　新人さんもまた取引お願いしますね　それじゃ！！」
「はっハァ」という新人の気の抜けた返事を聞くとトラックは出て行った…
「さて…」
辺りを見回すとパトカーが立ち並び殆どのヤンキーが検挙されていた。
「何て説明しようか…」
そういいながら携帯を開き「社長」と明記された番号を選び通話ボ

タンを押した。

…暫く章太郎の方耳の調子が悪くなったのはここだけの話である。

序章　第2節

「こんの……　バッカもんがぁぁぁ！！！」

たっぷりと間を溜めた後に発せられた声は章太郎の鼓膜だけでなく部屋中を震わせる。

「いや、その……　すんません」

章太郎が弁解しようにも彼を怒鳴る人物の刺す様な目によって黙らされる。

何故こんな状況になっているのかと言うと……　勿論昼間のあの事が原因である。

（まぁ確かにやりすぎちゃったと思うよ？でも、あそこで引いたらもっとめんどくさい事になりそうだったし……）

そう思いながらサングラス越しに俺を怒鳴る人物……

この人物こそ章太郎がお世話になっている建設会社の社長である

「ほんっとに！　何でこうお前は次々トラブルを持ち込むんだ！？」

「いや、そう言っても今回は俺は被害者……」

「馬鹿たれ！　百人以上の骨を折っておいて被害者もへったくれもあるか！？　担当した警部さんがお前を知っている人じゃなきゃお前も豚箱行きだったんだからな！？」

「うう、すんません……」

完全に意気消沈している章太郎を見ると彼は息をつきながら椅子に座りなおす。

「……いいか？　お前ももう昔みたいにヤンチャできる年じゃねえってのはわかっているよな？　今のお前には守らなきゃならん奴らがいるだろうに……　もう少し考えて行動しろ」

「……はいっす」

さっきの激しい口調とは異なり穏やかなそれで章太郎に話しかけると、力なく章太郎は答えた。

「まぁまぁ、あなたそこら辺でいいじゃないの？」

章太郎の後ろから柔らかい声がした。

二人が後ろに視線を向けると、扉を開きながら社長と同じくらいの年代の女性がいた。

「お前……」

「章太郎君だって反省してるんだし……　それに今回は人助けの延長でこうなったんでしょ？　警部さんたちも穏便に済ましてくれるって言ってるわけだし……ね？」

そうやって彼女……　社長の奥さんが社長をなだめると今度は章太郎の方を向く。

「章太郎君も、この人気持ちわかってあげてね？　この人も私もあなたたち家族――　勇馬君や安寿ちゃん達の事を思っているんだから……　」

「社長、奥さん……　ご迷惑をおかけしました」

彼女のその言葉に対し章太郎は頭を下げて答える。

「ほら、章太郎君も反省しているんだし今日はこの位で……ね？」

「ん……　まぁいい。　ちゃんと考えて行動しろよ？」

「わかりました」

章太郎が言い終えると同時に外からキーンコーンと時報が流れる。

「さっ5時になったことだし……　章太郎君も仕事が終ったのよね？　だったらもうあがりなさいな。　今日は安寿ちゃんを迎えに行くんでしょ？」

奥さんの言葉を聞くと章太郎は気がついたように慌てて腕時計で時間を確かめる。

「やべ、もうこんな時間……　社長、奥さん失礼します！」

改めて二人に頭を下げるとそのままドタバタと章太郎はその場から走り去った。

「あいつは……　もう少し落ち着きというものを持たないのか？」

「仕方ないでしょ？　章太郎君って家族の事――特に安寿ちゃんに関しては一生懸命じゃない」

「そりゃわかってるけどな……」

社長は椅子に座りながら煙草に火をつける……　がいささかその顔は何処か疲れていた。

「先生達が亡くなって4年、章太郎がここに入社して3年。それからずっとあいつはあの子達の面倒を見てきたんだから一生懸命になるのもわかるけどな……　全くたいした奴だよあいつは、俺が21の時なんてもっと適当だったしな」

「ふふ、それをあの子の前で言ってあげなさいよ？　喜ぶわよ」

「言えるかよ、そんなのあいつが調子に乗るだけじゃねえか」

紫煙を吐き出し照れくさそうに社長は答えると、外から聞こえるバイクの音に気がつき窓から覗き見る。

そこにはサイドカー付きのゴツイ黒塗りのバイクに跨りながら走り去っていく章太郎の姿がそこにあった。

「でも本当に仲良いわよねあの子達……」

それを見ながら奥さんは呟く。

「ん？　そうだな……」

そう言うと煙草に口をつけ

「血繋がってないのにな……　本当の兄弟みたいだよ」

紫煙を吐き出してながらそういうのだった。

……

……

……

「それじゃぁ今日も、みんなの将来の夢について発表してもらいましょう」

その声の後に「「「「「はーい」」」」」と元気良く子供の声が部屋に響く。

その子供の統一された服や部屋に飾られたおぼつか無い絵などを見るとここが幼稚園だということがわかる。

園児達それぞれバックを肩に掛けて集まり座っているのに対し先生が立っている事から今帰りの会の最中だということも見て取れた。

「今日は確か……　」

「はい！　はーい！」

「そうね今日は安寿ちゃんだったわね、それじゃ発表してください」

「はい！」と返事をしながら安寿と呼ばれた子供は前に出て行き教壇の上に立ち一息吸うと

「あたしのしょうらいのゆめは、すてきなおよめさんになることです！」

と大きな声で言うのだった。

「そうなんだ……　ねぇ誰のお嫁さんになるか教えてくれるかな？　もしかしてこのクラスの男の子？」

先生のその言葉に園服姿の男児の様子が変わりそれぞれの反応を示す。

たとえば……

ジィィィ

と安寿を見つめたり。

「〜〜！！」

と何かに祈るように手を組んだり。

またソワソワと落ち着きが無いように体を揺らす子や

「あっ安寿タンは、もっ漏の嫁！！」

とハァハァ危ない息を出す園児もいた……　最後のはおかしいがとりあえずスルーで。

その様子を見た先生は内心

（なんというか……　いくつになっても男って同じような反応するのね？）

と思いながら今度は安寿を見ると

（だけどまぁ……　この子なら仕方ないか）

と内心溜息をつく。

人形のように整えられた顔ではあるが、その瞳はクリクリとしてとても愛らしく。頭頂では光によって天使の輪が出来ているのが示すように肩まで伸ばされた髪はサラサラとしていた。　また膝や頬には怪我をしたのか絆創膏が貼り付けられているが、それ以外の肌はとても綺麗なものであり、絆創膏もお転婆さや愛嬌を倍増させている。

つまり何が言いたいのかというと。

（大人になったらすごい美人になるわね……　この子）

ということである。

しかし、安寿は男子の気持ちを裏切るように

「ちがいます！！」

と満面の笑みで答える。

すると男子は泣き崩れたり、天を仰いだり、逆に興奮する等様々なリアクションを取るのだった。

「？」

男子の気持ちなんぞわからない安寿は首を傾げる。

そんな男子に対して女子は……

「ほんとだんしってばかよねぇ」

「ほんとほんと〜　あんじゅちゃんがうちのだんしをすきになるわけないのにねぇ」

「あんじゅちゃんは、おうじさまみたいなひととけっこんするにきまってるもんね」

「そうよ！　安寿ちゃんは私のお嫁――」

「「「「えっ！？」」」」

「――　わたしのおよめサンバきいてくれるっていったもん」

（これで女子にも人気があるから完璧よね……　最後の子はやけに昔の曲が好きなのね）

そんな一種のカオスな空気を作り上げていたが外から

「園宮安寿（そのみやあんじゅ）　ちゃん　お迎えがきましたよ～」

という声がかかった事によって空気が止まり、名前を呼ばれた本人は……

「章太郎ちゃんだぁぁぁぁ♪」

パアアと顔を喜色に染めて荷物を持って外に飛び出していったのだった。

「私にどうしろってのよこの状況……」

いまだそれぞれのリアクションのまま固まった男子と、それを冷たい目で見る女子を目の前にして先生は一人呟くのであった。

……

……

……

トントントン

ジャージャー

リズミカルに包丁でまな板を叩く音や具材をフライパンで炒める音が部屋に響く。

ここはとある家の台所……　というよりシステムキッチンである。

時間ももう5時半をまわっており、世間では母親達が夕飯の支度をしている時間でありこの家も例には漏れなかった……　が一つ異なる点があった。

それは……

「章太郎ちゃんおなかすいた〜〜」

「おう、もう少しで出来るから待っとけ」

「は〜い」

台所に立っているのが見た目ヤクザのゴツイ男という点である。

男は可愛くデフォルメされた犬がプリントされたエプロンを身に着けており、その手先は慣れたように料理を行っているのを見てもこの男がこの台所の主と見てもいいだろう。

そして、その傍らにいるのが万人が可愛いと答える幼女であるため違和感が拭えない。

といっても、これがこの家――園宮家の日常的な風景なのだから仕方ない。

「お～い、あっこぉ　もうそろそろ出来るから皿と茶碗出しておいて」

「わかった～」

あっこ――　安寿はそう答えると戸棚に椅子を移動して器用に皿を持つ。

（もうそろそろだな）

エプロンで手を拭いながら章太郎は時計を見て、最後の家族が帰ってくるのを予測する。

「ただいまー」

予測すると同時に玄関から男性……　少年の声が家に響く。

「おにいちゃんおかえり～」

その声にいち早く反応した安寿はタタタと声の主を探しにいく。

「ただいま安寿。　兄さんは？」

「章太郎ちゃんならご飯作ってるよ～」

そんな会話が廊下から聞こえ足音からこっちに近づいているのがわかる。

「おう、お帰り勇馬」

テーブルに料理を並べながら章太郎は少年に声を掛ける。

「うん、ただいま兄さん」

するとそこには勇馬と呼ばれた少年が台所の入り口に立っていた。

彼の名前は園宮（そのみや）　勇馬（ゆうま）

少し着崩されたワイシャツに緩く締められたネクタイには学章が記されている。といってもそれが不恰好に見えないのは少年のその秀でた外見だろう。　全体的にシャープな体格は章太郎よりも１０センチ以上高く、サラサラとした黒髪と涼しげな目鼻立ちはザ・美少年といっても過言ではないだろう。

「やっぱし外は暑いね」

勇馬はそういいながら冷蔵庫を開き牛乳をパックごと口に付ける。

「あっ馬鹿！　ラッパ飲みはやめろってコップを使えコップを！」

「え～いいじゃん別に」

「何を言ってやがるあっこや俺も飲むんだからな！　それにあっこ

の教育上よろしくないんだよ！」

この年頃の子供は決まって家族の真似事をしたくなる。

特にそれが近くにいる兄ならなおさらである。

「うるさいなぁ母親じゃないんだから……」

「当たり前だ。　英馬先生と美月さんの墓前でお前らをちゃんとした大人にするって誓ったんだからな！」

お玉を突きつけながら章太郎は言うとリビングに飾ってある写真を目を移す。

そこには小学生の勇馬とまだ赤ん坊の安寿……　そして二人の男女がたっていた。

メガネを掛けた勇馬に良く似た男性が園宮（そのみや）　英馬（えいま）。

黒髪で柔和に微笑み安寿を抱いた美人の女性が園宮（そのみや）　美月（みつき）。

この二人の両親である。

「大恩のある先生方に代わってお前とあっこを育て上げるのが俺の使命なのだ！！」

写真を見ていた章太郎はサングラスと同じ幅の涙を出しながらお玉を握りながらそう叫ぶ。

このときなぜかバックで荒波が見えたが……　気のせいだろう。

「だというのにお前は……」

再びお玉を勇馬に突きつけると叫んだ。

「運動勉学共にパーフェクツで見た目も極上な上に性格も良くて学校じゃいつも女の子にキャーキャー言われて一日平均４回以上告られるのは当たり前……　ってどんなイケメンリア充野郎じゃぁぁぁ！？」

「そんなん知るかあああ！！」

「違うだろ！？　色々違うだろ！？　普通はお前はどうしようもない駄目学生でいつも学校の美人の先生に迷惑をかけているんだ！そしてそんなお前をどうにかしたいと考えた美人先生は頼りがいのある兄である俺に相談してそこから恋が始まる……　て感じじゃなきゃ駄目だろうがあああ！？」

「うるせぇ馬鹿兄！　そんなの兄さんの妄想じゃないか！？　それよりなんだよそれ！　そこら辺にあるネット小説にある内容みたいじゃないか！？」

「いいじゃん！？　別に夢見たっていいじゃん！？　俺ネット小説大好きだもん！！」

「見た目ヤクザが『もん』ってつかうな！　気持ち悪いだけだよ！！」

「ヤクザじゃないもん！！　普通の男の子だもん！！」

「どこがじゃ！？　見た目ヤクザの癖して料理、掃除、裁縫大好きその上サブカル大好きの家事万能ヤクザ型オタクの癖に！！」

「っき、きしゃまぁ～　言ってはならん事を言いおってからに！！表でろや！！今日こそ泣かす！！」

「よっしゃあ！　父さん譲りの剣術で今日こそあんたを越えてやる！！」

「ゆううううまあああああああ！！！」

「にいいいいさあああああああん！！！」

馬鹿らしい話からヒートアップした馬鹿二人を止める手は普通は無い。本来なら気が済むまで喧嘩させるしか方法が無いのだが……

「けんか……　なの？」

最終兵器が起動した。

「「え？」」

衝突する前にその声の発生源に目を向ける馬鹿二人。

そこには……

「けんかだめ……」

「いや、あっこ。これはな喧嘩じゃなくてな……　なっ勇馬！？」

（必死）

「そっそうだぞ安寿！　喧嘩じゃなくてだな……」（必死）

「おにいちゃ……　ヒック　木刀もって　ヒック　しょうたろちゃうぅ　てぶくろつけぇ」

安寿がそう指摘すると二人はそれぞれの得物を放り投げ……

「「マジですみませんでした」」

仲良く土下座をかまし……　やっと園宮家の夕食が始まるのであった。

序章　第3節（前書き）

最初に書いときます作者はサ〇ラ大戦が好きです……　というよりも愛しております。

序章　第3節

肉じゃが

ほうれん草の胡麻和え

金平ゴボウ

豆腐と油揚げの味噌汁の上デザートに手作りのプリンという、作った人物からとても連想できない家庭的な夕飯が終了して暫く経った園宮家では今何をしているのかというと……

「兄さんいつまでもテレビ占領しないでよ！」

「ハッハー！　先にとったほうが勝ちなのだ！」

「なにそれ！？　それこそ安寿の教育に悪いよ！？」

「馬鹿野郎！　これはな？　チャンネル争いという戦争を通して、世間の厳しさや行き着いた先の勝利、そして争う事のむなしさを学ばせるという俺的教育方法の一つなんだよ！！」

「余計たちが悪いよ！？　それに兄さん的教育法って今までまともな物なんて一つも無かったじゃないか！」

「何だと！？　『いじめられない百の方法～やられる前にヤレ～』や『クラスで頂点を取れ！！～これで君も一番だ！～』とか『章太郎様のお料理教室～一撃必殺！愛のレシピ！！～』と『サイホウ～アナタノココロヲヌイツケタイ…～』……　など等の俺の教育が

まともじゃないって言うのか！？」

「お料理教室と裁縫の副題含めて全部有害すぎるよ！？　一体兄さんは安寿をどうしたいの！？」

「美月さんレベルのヤマトナデシコ？」

「何故疑問系！？　ヤマトナデシコなら家事系以外いらないじゃないか！？」

「そこはお前あれだよ……　貞淑な中にも激情を潜め、夫を立てながらも自分の我を通すという新世代のヤマトナデシコを目指すには全部必須じゃないのか……？」

「わからなくなってるよね！？　自分で言ってて訳わからなくなってるよね！？　その『？』が自信の無さを物語ってるよ！？」

「……人の揚げ足を取るような男に俺は育てた覚えはないぞ？」

「そもそも兄さんが原因じゃないか！！」

「けんか……？」

「ＨＡＨＡＨＡ　すまん勇馬少し言い過ぎたな？」

「ＨＡＨＡＨＡ　いいんだよ兄さん。たった三人だけの家族じゃないか」

「ＨＡＨＡＨＡＨＡ」と笑いあう二人を見て安寿は……

「みんななかよし♪」

とニコニコ笑うのであった。

……

……

……

「お風呂洗っといたからね」

タオルで髪の毛をガシガシと拭きながら、勇馬はリビングでゲームに興じている章太郎に報告する。

「おーう、悪いな。こっちもあっこは寝かしといたからな」

声だけで返す章太郎。

「いいよ別に、兄さんはいつも安寿と入ってくれている上に相手も

してくれているんだし……　ってまたそのゲームやってるの？　確か『桜花大戦』だっけ、この間クリアしたんじゃないの？」

「この間クリアしたのは無印のＰＳ２（プレイサターン）版だ。んで今やっているのがＳＳ（スーパーセガ）の２をプレイ中なのだ」

プレイ中と言っているわりには少しもコントローラーを握らない章太郎、そのためかテレビ画面にはさっきから同じ映像と音楽が流れ続けていた。

そんな章太郎を不思議に思いながら勇馬は尋ねる。

「えーと……　さっきから何も進んでないんだけど……」

「いや良いんだよ、今日はＯＰと音楽を楽しむ日だからな。　本格的に始めるのは明日からだ……　来月の今頃には？まで終って今度はＰＳＰ（プレイサターンポータブル）の１・２が祝２０プレイ目を向かえる予定だ」

「アア、ソウデスカ」

（そういや、兄さんこのシリーズに関しては廃ゲーマーだっけ……）

実際、章太郎は最新機種や格ゲーからＲＰＧ、勿論ギャルゲー等様々なソフトを所持しているのだ。

しかしどんなことがあろうとも古い機種を捨てようとはしない。

過去に勇馬が聞いて見た所……

（桜花が出来なくなる）

との一言でバッサリだったのだ。

そんな勇馬を尻目に章太郎は嬉しそうに……

「そして最近なぁ、あっこがこれに興味を持ち始めてな……　先達としては嬉しい限りなのだが何からプレイさせたらいいのか迷ってな？」

「……ホドホドニシテネ？」

（違うよ兄さん……　安寿はゲームに興味じゃなくて、兄さんがやってるから興味を持っているんだよ……）

勇馬は米神を押さえながらそう心の中で思った。

ちなみに余談であるが安寿のお気に入りのキャラは、３に出てくるモブキャラの恰幅の良いメカニックマンらしく安寿はこのキャラが攻略できない事を残念がったらしい……　むしろ攻略できたら趣旨が別のゲームになってしまうが。

そんな様子の章太郎に勇馬は「はぁ」と一息ついてから

「兄さん、話があるんだけど……」

と再度声を掛けた。

「ん、何だ？　バイトの話なら却下だぞ」

ゲームの電源を切りながら勇馬に体を向ける章太郎。

対する章太郎の言葉を聞くと息を吐きながら口を開く。

「またそうやって言うんだから……　生活費とか小遣いとか兄さんに全部兄さん任せって言うのは正直心苦しいし……　暇があるときぐらいバイトして兄さんの助けになるかなと思って……」

「馬鹿たれ」

章太郎は勇馬の頭に軽く拳骨を落とす……　といってもじゃれあいみたいな物であるが。

「学生は学生らしく保護者のすね齧って生きていればいいんだよ……　実際、家計がそんな切羽詰まってるわけじゃないしな」

「でも……」

「大丈夫だ、商店街の人たちやご近所さん、社長や奥さんがいつも気にかけてくれているんだから早々破綻しないって……　貯金だってほら、お前を大学に行かせてあっこを育てる余裕ぐらいあるんだからよ」

「……」

「何気にしてんだ？　ハハッお前は真面目に考えすぎだっつーの！　俺がお前のときなんて先生達の脛を堂々齧っていたんだぞ！　だからお前らもそうする権利があるんだよ」

「だってその貯金って……　兄さんが大学にいくため――　」

「シャッラープ！　この話はここまでだ！」
勇馬は強引に話を遮られると悲しそうに目を伏せる。
その様子を見た章太郎は深く息をつくと続けて口を開いた。
「でもまぁあれだな。　お前がこの話をするのも１０回以上だしいい加減俺も応対すんのも面倒になってきたことだし……　まあこれも社会勉強だと思えばいいわな」
「っそれじゃ――」
「ただーし！」
顔をあげる勇馬の顔に人差し指を向けそのまま振る。
「勉強や部活に支障をきたさず体を守れよ？　お前は唯でさえ頑張りすぎるんだからな？」
「……兄さんに言われたくないよ」
「フッフーン　羨ましかったら俺レベルのパワフリャーになることだな！？」
力瘤を作りながら章太郎は言う。
「ハハ、頑張ってみるよ……」
「期待しないが、まぁ頑張れ……　話ってそんだけか？」

ひと段落したところで章太郎は勇馬に他に何かあるのか聞いて見ると、勇馬は言いづらそうな顔になる。

「え、えーと……あぁ～　うん、まぁその相談みたいなものなんだけど」

「何だ？　二次元における女体の神秘とどこを殴れば一発で沈めれるか位ならすぐ答えられるぞ？」

「何でそうなる……　笑わないでよ？」

「おう」

「実は……」

……

……

……

「あー話をまとめるとだ、最近夢を見ると？」

「うん」

「それは、全部同じ内容だと？」

「うん」

「何もない空間でお前と安寿がいて白い光が降りてくると？」

「うん」

「んで、白い光は何かを喋っていて最初は良く聞こえなかったけど最近ははっきりと聞こえるようになったと？」

「うん」

「そして昨日、はっきり聞こえたと？」

「うん」

「『汝らは選ばれし者なり、いづれ来たる災厄に抗う力を手に入れるだろう』と言われた後豪華な城みたいなところに飛ばされたと？」

「う、うん」

「あっこもそれっぽいのを見たと？」

「う……　うん」

「……」

「……」

「……」

「……」

沈黙が続く中、章太郎はスッと立ち上がると勇馬の近くに移動し肩に手を置く。

しかし、その表情は憐憫と同情と落ち着きを持っていた。

「勇馬……」

「兄さん？」

不気味な程優しい章太郎の雰囲気に勇馬は首をかしげる。

「いいんだ……　何も言わなくていいんだ……　それは、そう一過性の風邪みたいな物なんだ」

「え、ちょ」

「お前ぐらいの年頃はそういうものにあこがれるものなんだよ……
今はまだ出ていないけど自分にはすごい力が眠っているんだとか、
学校の窓ガラスを割ってみたくなったりとか、俺もそうだったから気にすんなよ……　な？　だけどそれにあっこを巻き込んじゃいけないぞ？　あいつはまだ純真なんだから……」

「いや、なにを……」

「そう……　ただの厨二――」

「あんたに話した俺が馬鹿だったよ！！」

こうして、園宮家の夜は更けていく……

本来だったらこの話も兄弟の馬鹿話になったはずだっただろう。

朝になれば全員が起きて朝食を食べ、仕事や学校に行き、夜に兄弟の笑い声が響くそんな日常に埋もれていつしか忘れてしまい……

いつか、三人が大人になったとき「こんなこともあったね」という笑い話になる筈だった……

そう「筈」だったのだ。

章太郎も

勇馬も

安寿も

知るはずも無かった。

これが、物語の幕開けの予兆になると知るわけが無かったのだ――

序章　第４節

（ここは……　どこだ？）

章太郎の胸中に浮かんだのは先ずそれだった。

今、彼を囲む景色は全てが見慣れぬものばかりであった……　が何処かとても懐かしく感じさせた。

目の前にそびえる立派な純和風の屋敷、そして屋敷の前に広がる立派な庭園を見るとなぜか心が締め付けられるような気がした。

（何故だ……　何故俺はこんなにも……）

涙が出そうになっているのか？　いや、あるいはもうすでに出ているのか？

章太郎は自分の目元を確認しようと腕を動かそうとするのだが……動かない。

（何が起きたんだ？）

自身に起きた異常を探るために四肢に力を入れるがビクともしない……　それどころか自身の意思とは別に体が動き出したのだ。

（夢……か？）

章太郎は漸くこれが夢だと思い当たる。

（だとしたらやけにリアルだな……）

彼がそう思うのも無理は無い。

身体こそ自由には動かないが、草木の匂いや日光の暖かさ……　風が運ぶ心地良さやジャリジャリと玉砂利を踏みしめている感覚が生きているのだ。

まさに身体の主と感覚だけを共有している状態なのである。

（……まるで幽霊になったみたいだな）

そんなことを考えていると身体の主は何かを見つけたように駆け出す。

（どうやら子供っぽいな）

章太郎は走り方や自分の目線の低さ、また時折みえる手や足の大きさから身体の主がまだ小さな子供だと推測する。

しかし、走り方がおぼつか無い。

いつ転んでもおかしくないぐらいに不安定な走り方なのだ。

（あ、転んだ）

どうやら痛覚は共有していないようで痛みは感じないのだが、視覚の情報だけで主が転んだ事が理解できた。

（こりゃ、泣いてんな）

いつまで経っても自分の目が地面を写している事から、主が転んでぐずついているのが章太郎の目に浮かんだ。

（ん～これが俺の身体じゃなきゃ、さっさと起こしてあやす事が出来るんだがな……）

彼がそう思っていると……

（お？）

一瞬の浮遊感の後、足が地面に立っているのがわかった。

（誰かに起こしてもらったか）

主の服の汚れを落とすように優しくはたくその手を見て理解する。

章太郎はその手に目を留めた……　女性の手だ。

彼女の手が振られるたびに甘く何処か懐かしい香りがした。

主も手の主に興味が湧いたのか視線を上に向けた。

するとそこには……

（やっべ……　超美人だ）

紺色の袴と藤色の着物という大正時代の女学生のようないでたちの女性がいたのだ。

服の彩色こそ地味であるが……　関係なかった。

鴉の濡羽のような髪は柔らかく一つに束ねられ肩に流されており、優しく主を見る黒の瞳や薄い紅を塗った唇艶々としているのが目に取れる。

完璧なる日本美人――　それが彼女だろう。

（うお、馬鹿！　もっと見させろ！！）

主が突然視線を外したのだ。

彼女に見とれていた章太郎は大人気なく主に怒るのだが……　次の主の行動に歓喜する事になる。

パフ

顔に柔らかいものが当たる……　主はそのままスリスリと顔を動かす。

（こっこりはましゃか！？）

そう主は太ももに顔を突っ込んでいたのだ。

主にとっては甘える行動でも感覚を共有している章太郎にとっては……　未知の体験だった。

（いっいや！？　待てこれは違うぞ俺がやってんじゃないんだぞ！？　しかし、感じる柔らかさは現実のもの？　違う！　落ち着け！　リアルでこんな事あるわけない！？　そうだありえないんだ！！

じゃぁなんで柔らかいんだアアアアアア！！？）

年齢＝彼女いない暦……　悲しい事に章太郎はこの図式に当てはまる男だった。

章太郎が一人混乱している中、主は満足したのか離れるとまた和風美人の顔を見上げる。

（お……終ったか？）

疲労困憊した章太郎も見上げると彼女が懐から何かを取り出しているものを見て何か気がつく

（あれは……　）

彼女が取り出したのは章太郎にとって見覚えのあるものだった。

首に掛けれる程の紐がついた藍色の小さな巾着。

そのまま彼女が主の首に掛けようとしたのを見ると

章太郎の意識は靄がかかったように白んでいったのだった。

……

……

……

「なんちゅー夢じゃ」

開口一番、目が覚めるて呟くと同時に彼は目元に指先を這わす――

微かに湿っていた。

（やっぱ泣いてたか）

指先に視線を向けながらそんなことを思う。

夢なんて今まで何度も見ているが、目が覚めれば大概忘れている。しかし、さっきまで見ていた夢は章太郎が目を覚ました後もはっきりと記憶に残っていた。

（俺のガキの頃の記憶なのか？）

彼には血の繋がった親族はいない。

物心ついた頃には施設に預けられており幼少期はそれを酷くコンプレックスに感じていた時期もあったが、血の繋がりよりも濃い家族を持った今となってはそれもほぼ感じなくなってはいたが……

（そーいやあの巾着って）

最後に出てきた良く知る巾着を思い出し自分の胸元……　正しくは首に掛けられたそれを見る。

何度も変えた紐や所々ほつれてはいるが夢で見たものと同じ巾着がそこにあった。

章太郎はおもむろに巾着の口を開くとそこに指を入れ中にあるものを取り出す。

それはただの丸くて青い石……　それこそ何の変哲も無いそこら辺

にあるビー玉と言ってしまえばそれにしか見えないだろう。
だが、章太郎にとってはただの石と思えなかった……　じゃなければ１０年以上も大事に身に着けてはいない。
（まっ、なんで大事なのか自分でも解らないんだけどな）
朝日を蒼く反射するそれを掌の上で転がし、暫くして巾着に戻すと今度は深く溜息をついた。
「そんなおセンチな性格じゃないのは自分で知ってるはずなんだがな……」
一人呟く。
覚えてない子供の頃の記憶を思い出し干渉に浸る――　そんな自分に苦笑しながら傍らに置いてあったペットボトルのぬるい水を飲み、煙草をくわえ火をつける。
（勇馬の厨二病にあてられちまったか？）
そんなことを思いながらゆらゆらと彷徨う紫煙を呆と眺めていた――
……
……
……

騒ぎ始めた蝉の声や、熱を帯び始めた朝の日差しを感じさせない空間がそこにはあった。

ここは、園宮家の裏にある道場である。

外に比べればまだ比較的涼しい道場では、いま道着姿の一人の少年が剣を振っていた。

受け流し、切り返す。

流れるような足運びから突き崩す。

素振りなどの基本的な動きでなく、実戦に近い動きをしている。

しかし、少年に対峙している相手はいない……　だが少年の剣はまるで誰かがそこにいるかのように振るわれていた。

ダン

踏み込みで床を鳴らすと少年の剣が胴を薙いだ形で止まる。

手から流れ出た汗が木刀を伝い道場の床を濡らし……　少年は息を吐いた。

「朝から精が出るな」

少年とは違う男の声が道場に響く――　章太郎である。

「兄さん、おはよう」

少年――　勇馬は章太郎の姿を確認すると袂を直すとそのまま彼に向き直る。

「おう、おはよう」そういうと章太郎は神前に一礼し道場に足を踏み入れた。

「どうだった？」

おもむろに章太郎が勇馬に聞いた。

「無理無理、今日も負けたよ……　あ～父さんに勝てるようになるのも何時になるんだろう」

「まぁそうだろうな……　毎度毎度思うけど、よくもまぁ想像だけでそこまで動けるな？おまけに自分と立ち会った時の動きじゃなくて先生が俺とやったときの動きだろ」

「う～ん……　ひとえに集中かな？　集中して目の前に相手を作って父さんの動きと速さをトレースしてるだけなんだけどね」

「それがどれだけ難しいか解ってないだろ……　」

章太郎が呆れながら言うと「ははは……」と勇馬は笑って答えた。

「流石に限界はあるけどね……　俺が相手のときは父さんはあくまで稽古だったし、父さんが本気っぽい動きしたのは俺が知る限り兄

さんの時だけだったしね」

「問答無用にボコボコにされたけどな」

苦笑いしながら章太郎は勇馬の父、英馬と立ち会った時の事を思い出す。

章太郎が拳で英馬が剣という得物の差があったが、そんなことは関係なかった。

（俺が一発入れようと前に進むといつの間にか後ろにいるんだもんなぁ）

世の中には上がいると思い知らされたときでもあった。

章太郎の武器は人のカテゴリーから大きく外れた打たれ強さと膂力である。それこそ、木刀で打ち据えられたぐらいではどうにもならないのだが。

あの時の英馬の一撃一撃が身体の芯まで響いていたのを今でも覚えている。

園宮英馬……　職業は教師と言いながら自分の家の裏に道場を持ち、その腕前も人間の域を超えているという男であった。

（別に流派とか構えているわけじゃないんだけどね……　じゃあなんでそんなに強いのかって？　いつか教えてあげるよ）

英馬が生前そんなことを言っていたが……　結局、真相は解らずじまいであった。

（事故に巻き込まれてだもんな……）

家族で出かけていた時に自動車事故に巻き込まれたらしく英馬と美月は亡くなった。

勇馬と安寿は軽傷ですんだというのが不幸中の幸いと言える。

（先生……　美月さん……　二人は元気でいますよ？）

章太郎は天国の二人に語りかけるのであった……

クラッシュ！！　完

「じゃねぇよ！　始まったばっかじゃ！！」

「……どうしたのいきなり？」

いきなり大声を上げた章太郎に首をかしげる勇馬。

「いや……　なんでもない。まぁあれだな、あえて言うとしたら昨日のお前の厨二に当てられたと言っておこう」

「だからあれは厨二じゃなくて！　……お！？」

反論しようとした勇馬に章太郎は頭からタオルを被せてそれを防いだ。

「もうそろそろあっこを起こすから、お前もさっさとシャワー浴びてこいメシにすんぞ」

同時に章太郎はスポーツドリンクを投げ渡し、それを受け取った勇馬は……

「……はーい」

不承不承（ふしょうぶしょう）といった風に声を返すのであった。

……

……

……

園宮家の朝食は基本、勇馬が作る。

朝が早い勇馬が朝食を作り、夜は仕事で遅くならない限り安寿を迎

えに行った章太郎が作る事になっていた。
食事当番が決まっているわけではないがこのローテーションで周っていた。
昼は平日なら安寿は給食、章太郎と勇馬は適当に済ませると言った感じである。
しかし、今日は土曜日……　剣道部で出かけた勇馬以外の休日の二人は昼食を準備しなければならない。
（さて昼はどうしようか？）
掃除機を掛けていた手を止めて章太郎はふと考える。
時計を見るともうそろそろどうするか考える時間帯である。
「おーい、あっこ」
「なーにー？」
「昼飯どうする？」
部屋で大人しく絵本を読んでいた安寿に章太郎は尋ねた。
安寿は「ん～」と可愛らしく考えるとふと閃いた様に
「おべんとう！」
と答えるのであった。

「弁当？」

「うん！おべんとうもっておそとでたべるの！！」

「ピクニックか……」

外は晴天……　天気予報でも今日、明日は晴れと言っていたのを思い出す。

日射病にさえ気をつければ絶好のピクニック日和だといえるだろう。

「よし！　今日はピクニックデートと洒落込もうぜ！」

「わーい！　章太郎ちゃんとデートだああ！！」

顔を輝かせながら喜ぶ安寿、対して章太郎は……

（かッ悲しくなんかないもん！）

デートに誘えるのが安寿しかいない現実を確認しちょっぴり切なくなっていた。

……

……

……

「戸締りオッケー？」

「おっけー！！」

戸締りを確認し、作った弁当と水筒を持って二人は外に出る。

「んじゃ、ちょっと待ってろよバイク出すから……」

そういうとズラッと並んだ中から、カプセルを一つを取り出し指紋承認してから投げる。

すると、今まで何も無かった所に大きいサイドカーが付いたごついバイクが現われた。

（いつ見ても不思議だな……）

ここ数年で普及し始めたカプセルをまじまじと見ながらそう思う章太郎――　勿論、その原理を彼が理解している筈もない。

（まぁ場所はとらんし便利だからいいんだけどな）

その他に常に貴重品を身に着ける防犯性もこの製品の売りなのだが……　この男のカプセルには関係ない。

何故かというと……　章太郎が持つこれ、欠陥品なのである。

収納が出来ても収納した物の重量はそのままであるという普通なら

使えたものではないのだ……　誰にも運べないのだからある意味究極の防犯なのであるが。

（まぁ貰いもんだから仕方ないけどな……　重量はあまり気にならないし、普通のより頑丈だし……）

とあるトラブルに巻き込まれた時にタダで手に入れた事、欠陥が欠陥にならなかったため章太郎はお気に入りにしていた。

そして、お気に入りと言えばこのバイクである。

このバイクは章太郎が『法的に免許が取れない頃から』愛用していたバイクである。

その上昔一緒にヤンチャをしていたバイク屋や職人達と共に改造に改造を加えており、どんな悪路だって走破できる化け物バイクに仕上がったのだ。

化け物と言われる由縁はそれだけでない。

現在の主流である太陽光を燃料にする光エンジンのほかに……　今となっては珍しいガソリンエンジンを搭載しているのだ。　今ではバイク愛好者の中でも物好き位しか積まないというガソリンエンジン……　章太郎もその物好きの一人だったのだ。

（ガソリンの匂いがたまんねぇ）

というのが本人の談……　けしてシンナー中毒者ではないと言うのをここに記しておこう。

そしてダブルエンジンを搭載した結果……　グリップに付けられたボタンを押すことによってバイクの限界を吹っ飛ばしたパワーが出るのである。

もちろん、車体も本人もそれに耐え切れると言う……　持ち主共々化け物と言っても差し支えないだろう。

勿論、本日のピクニックでは光エンジンのみを使った普通の運転である。

（まぁ、ここ数年調整のみで全然使ってないんだけどな）

……それだけ彼が丸くなったということだろう。

網膜承認からスターターを入れエンジンを温める――　すると安寿は手馴れた様子でサイドカーに乗り込み子供用のシートベルトをしていた。

頭には「安寿」と小さく記されたピンクシルバーのヘルメットを被り、今か今かと待っていた。

その姿に笑みを浮かべて章太郎はバイクに跨り。

「そんじゃ、出発しますか？」

「しゅっぱ～つ！」

アスファルトで舗装された道を走るのであった。

……
……
……

「章太郎ちゃんあっちいこ、あっち！」

「わかった、わかった」

今二人は街から少し離れた運動公園まで足を伸ばしていた。

安寿は久しぶりの章太郎とのお出かけにはしゃいでいるのか、先程からずっとこの調子である。

「！　ここにしよ！？　おべんとたべるの！」

安寿が示したのは大きな木で木陰ができた所だった。

他にも、ビニールシートを敷いている家族らしき人たちが数組いたが……　そこに新しく入っても問題ないだろう。

「よし、んじゃビニールシート敷くの手伝えよ」

「らじゃー！」

章太郎は近くにいる人たちに軽く頭を下げると作業に入る。

草むらにビニールシートに敷いてまったりしていた人たちは、小さな少女に手を引かれる厳ついサングラスの男という図に一瞬驚くが、少女がとても楽しそうにしているのを見てにこやかに二人の様子を見つめている。

先程から二人を見てそのような反応をする人達ばかりである。

まぁ二人を見ていると『やんちゃな娘と大好きなお父さん』という図式がそのまま当てはまるのだから当然だろう。

シートを敷くと章太郎があぐらをかく。

すると安寿は……

「へへ～　あたしのせきはここ！！」

章太郎のまたぐらに入るように座るのだった。

行き成り座る安寿に一瞬驚きながらも、すぐ笑いながら章太郎は、

「おぉ座れ座れ」

と言うのだった。

「ねえねえ、きょうのおべんとうは？」

二人分というにはかなり大きい弁当箱を見ながら待ちきれないとい

う風に安寿は章太郎に聞く。

園宮家の食事は基本激盛りである。

安寿はともかく男二人――　勇馬と章太郎がとにかく食べるのだ。

食べる、とにかく食べる。

前の話だが食べ放題の店で二人が限界に挑戦したところ……

「もう勘弁してください」

と店長が頭を下げたのだから想像はしやすいだろう。

そんな章太郎が作った弁当なのだ……　勿論――

「ハッハー！　激盛りサンドイッチセットだぜこのやろー！！」

から揚げにポテトサラダ等のおかずや、彩り鮮やかなサンドイッチが弁当箱の中に詰められていた。

「んでデザートが……　あっこの好きな杏仁豆腐じゃい！」

そういいながら章太郎はタッパーに移し変え保冷材で冷やしていた杏仁豆腐を安寿に見せる。

元々昼食のデザートにする予定だったのだろう、手作りにしては完成度の高い杏仁豆腐は涼しげな魅力に溢れていた。

「きゃー」

悲鳴を上げるように喜びを表す安寿。

「それじゃ……」

「「いただきます！！」」

二人でそういうと濡れタオルで手を拭き、章太郎は早速サンドイッチに手を伸ばす――　が安寿は動かない。

それどころか、章太郎の顔と手に持たれたサンドイッチを交互に見た後にっこり笑って、「あーん」と口を開けてまっている。

その意図に気付いた章太郎は少し照れくさそうにしながら、その小さな口にサンドイッチを運ぶのであった……

……

……

……

弁当を平らげ、食後の運動という事で遊んだ後休憩といったように二人はまったりとしていた。

「時間だな」

少し傾いた太陽を見て章太郎はシートの片付けを行おうと立ち上がるが。

（ん？）

何かが自分の服を引っ張っているのを感じた……　勿論、安寿である。

服の裾を引っ張る安寿はスヤスヤと眠りの世界に旅立っていた。

それを見た章太郎はやれやれと言った風にすると、安寿を片手で抱き上げながら器用に片手でシートを畳む。

そのままシートを脇に挟み、片手には荷物を持ち片手には安寿を抱いたまま帰路に着く。

「重く……　なったな」

ふと言葉が漏れる。

章太郎がとある理由で園宮家にお世話になったのは、中学二年から高校卒業までの４年間である。

安寿が産まれたのは三年目の時、章太郎が高校二年の時だった。

産後の美月から生まれたばかりの安寿を抱かせてもらったのを章太郎は今でも覚えている……　それどころかその場で涙を流してしま

ったのも今では良い思い出である。

美月の家事の手伝いの他に安寿の面倒を見ていたのも思い出す。

華や竪琴、茶道の指導をしていた美月は多忙な時がたまにあり、その時は章太郎が安寿の相手をしていたのだ。

やれ、ミルクをこれだけ飲んだ――

やれ、泣き止まない――

やれ、オシメってどこ！？――

等その日の食卓で話の種が尽きる事がなかった。

大変だったが、それだけ充実していたと言えるだろう。

そして、高校卒業と同時に章太郎は家を出た。

英馬と美月――　勇馬からは引き止められたが働けるようになったのだから何時までもお世話になるわけにはいけない……　そう考えたのだ。

英馬から紹介された建築会社……　現在お世話になっている社長の会社でアルバイトをしながら貯金を溜めて一年……　章太郎の耳に信じられない話が飛び込んだ。

英馬と美月が亡くなったと……

恩人たちの訃報を聞いて急いで家に戻って見れば、そこには黙って

ジッと耐える勇馬と父母が亡くなった事にいまだ気付かない安寿――　そして――

見たこともない『自称親戚』の大人たちだった。

勇馬達そっちのけで遺産の話をしている『自称親戚』にブチキレタ章太郎は一人残らず家の外に叩き出し

「こいつらは俺が面倒を見る……　手前らは去ねやぁ！！」

と叫んだのであった。

勿論、この後一悶着あったのだが……　英馬と美月の友人達の助力と章太郎１０代最後の補導によって何とか納まったのだった。

（色んな事があったなぁ）

二人の面倒を見させて欲しいと土下座をしたこともあった――

勇馬とぶつかりあったこともあった――

安寿の教育に苛立ったこともあった――

……　夢を諦めて就職もした――

これもすべて、恩に報いるため……

（違うな）

最初はそうだったのかもしれない……　でも今は違う、自分が二人と一緒に居たいのだ。

毎日、勇馬と馬鹿をして――

毎日、安寿と遊んで――

毎日、メシを食うたびに家族が笑っている――

平凡だけど最高の生活。

章太郎にとって幸せは二人の事を指しているのだ。

「んぅ……　章太郎ちゃん」

耳元で安寿が小さく寝言をこぼす……

（可愛い奴）

安寿を起こさないように抱き直しながらふと考える。

安寿は可愛い……　おまけに美男、美女といえる二人を父母に持つのだ成長したらとんでもない事になるだろう。

きっと男子にとって生物兵器に等しい美人になるのは確定だろう。

そしていつかは……　ふと考える。

「章太郎ちゃん……　今までお世話になりました」

三つ指をつく安寿が見える。

「左……　右……　ふふ、落ち着いてね？」

きっと先生の変わりに俺がヴァージンロードの父親役をやるんだろうな。

そして、前で待つ新郎の前に立ちウェディングドレスを身に纏った安寿の手を渡す……

前に一発殴る

いや、一発じゃ許さないサングラスと同じ幅の涙を流しながら章太郎は新郎に馬乗りになって一発一発と続けて拳を落とす……

「アカン……　血まみれウェディングとか、ホラーを通り越してギャグだろ……」

新郎をレッツパーリィィィィ！！！　し始めた妄想を消す様に頭を

振る章太郎。

（まぁ……　とにかくだ）

「安寿を嫁に貰う奴は最低でも勇馬と俺を倒してもらわないとな」

とそんな事を考えながら道を急ぐのだった……

……

……

……

「お兄ちゃんおそいねぇ……」

「……そうだな」

八時を回った時計を見ながら安寿と章太郎は言う。

勇馬が帰ってこないのだ。

夕食も食べずに待っていても電話すらかかってくる様子がない。

真面目な勇馬は遅くなるなら電話はきちんと入れる男である。

何かに巻き込まれたといっても勇馬の腕前なら大抵の事切り抜けられるはずなのだ。

（少し様子を見に……　ん、メール？）

「はーしーれー　光速のー」と歌う携帯を手に取り内容を確かめる。

勇馬だった。

『ごめん、もう着く』

簡潔に今帰る事を伝えていた……　というより簡潔すぎる。

（ん～　なんか切羽詰ってる感じがするな……）

メールの様子に何かいやな予感を感じていると……

「たっ、ただいま～」

妙に疲れた勇馬の声が玄関から響いてきた。

「おう、遅かった――　へ？」

その様子を確かめようとした章太郎が間の抜けた声を出す。

「お兄ちゃん……　そのひとだれ？」

「いやぁ～　その～　ハハハ……」

安寿が勇馬の抱きかかえる――　世間一般的お姫様抱っこする『女性』について聞くが勇馬の歯切れは悪い……

美人……　美人である、しかし――　薄桃色がかかった踝まであるような銀髪……　服は髪と同じような色の着物――　所々動きやすそうに改造を加えたものを身に着けていた。

ここまででも、何かおかしいというのに極めつけに……

（角？）

耳があるだろう場所が髪に隠されそこから角らしきものがニョキと生えていたのだ。

（なんだこれ……　形はＤＢの願いを叶える龍と似ているけど？）

まじまじと見ていると女性とバッチリ目が合う。

驚くほどに白い肌と……　蒼い瞳だった。

その瞳の美しさに章太郎は狼狽するしかし、女性は声を絞り出そうと……

ぐぎゅるー

辺りに響く間抜けな音。

発生源は章太郎ではない。

視線を安寿、勇馬に移すがそれぞれ自分ではないと首に振ったりし

て反応を返す。

そして、最後に女性に視線を移す……　と女性は

「すっ……　すまないが」

一旦言葉を切り、顔を真っ赤にさせて言い難そうに

「食事を頂けないだろうか？」

というのであった。

序章　第5節

「ヲイ……」

一人の咀嚼音が響く中、章太郎が口を開く。

「なっ何？兄さん」

「俺は良いっていったさ……　それは認める。　認めるけどよぉ……」

「これはないだろうが！！」叫びながら章太郎が指差した先には――

夕飯をほぼ一人で平らげたさっきの女性がいた。

冷めても衣のサクサク感を失わない厚切りとんかつ――計四枚

サトイモと大根の味噌汁――鍋半分以上、

付け合せのオクラの胡麻和え――作り置き全部

十合以上炊いた白米はお釜の中には殆ど残っていなかった。

かろうじて安寿の分だけは確保できたが……　彼女は大食らいの男

二人の分を一人で食してしまったのだ。

（今日はカップメンだな……）

目の前の光景に米神を揉みながらそんな事を考える章太郎。

「……　ごちそうさま」

彼女は満足したのか箸をおく……　ただ、それだけなのに高貴なオーラを醸し出していた。

（良いとこのお嬢さんか？）

あれだけ食べたのに食い散らかした様子も見せず、それどころかお椀にご飯粒一つ残っていないところや彼女の尊大な口調は章太郎にそう思わせるには十分であった。

「美味だった……　久々に満ち足りたぞ。　そういえばまだ名を名乗ってなかったのう？　妾は代々『覇将』の血筋に仕える龍人族が直系の姫――　白姫（しらひめ）という、以後見知りおけ」

食後に安寿が淹れた緑茶を啜りながら彼女は満足そうに言う。

「……そりゃどうも」

今夜の食事を食べられて苛々している章太郎は不機嫌に返す……が彼女は何故かその態度に目を光らせると勇馬に向かい――

「主様……　この包丁人の腕は認めるが、いささか礼儀が成っていないのでは？」

と告げるのであった。

「「は？」」

行き成りの言葉に章太郎と勇馬は聞き返すが、二人を尻目に彼女は話を続ける。

「特に先ほどからこの使用人の妾に対する視線……　それに妹君に女中の真似事をさせる等、龍人の姫である妾や主様方に対して不敬であるとしかいいようがないだろう？　……勿論主様は別だぞ？　なにせ主様は妾の……」

どことなくピンクの雰囲気を漂わせながら彼女は勇馬ににじり寄るが……

「ヲイ、コラ待てや」

章太郎がそれをさせない。

「なんじゃ？　今から主様との睦み事だというのに……　空気を読まぬ使用人じゃのう」

彼女は行き成りの声に苛立ちを含めながら章太郎に向き直る

「空気を読まんのはお前だろうが！？　ガキがいる前で盛ってんじゃねえぞ！？」

その様子に頭に#を作り声を荒げる。

「おおこれは失礼を、妹君の前ではしたない所を見せてしまいましたな……　申し訳ありませぬ」

「あ、うんいーよ」

章太郎の傍らで茶を啜る安寿に謝罪すると、「フン」と鼻を鳴らしあからさまに違う態度で

「その諫言感謝するぞ使用人」

とあまり豊かとはいえない胸を張りながら彼女は言うが……　少しも感謝しているように見えない。

「それのどこが感謝しとるんじゃ！！　それにさっきから使用人、使用人言いおってからに……」

「ん？　お主、主様に使える使用人ではないのか？」

「違うわ！　このコスプレ女が！！」

「こすぷれ？　よくわからぬ言葉を使うのう……　どこの言語じゃ？」

「ぬおおおおお！？」

両手で頭を抱え、怒りのあまりに声が出なくなる章太郎と頭に？マークを浮かせる彼女――　勇馬はその光景と自分の服の裾を涙を目に溜めながら引っ張る安寿を見て一息つくと……

「とりあえず、静かにしろ！！」

と声を張る。

その裂帛は強烈なものである、それこそ食器が小刻みに震えたり天井に吊られた電灯が揺れていたりするほどである――　それを人間

相手に使うのだ勿論……

「ひ！？」

「ん？」

必ず何らかのアクションを起こす　……章太郎の普通のリアクションに関しては仕方ないだろう。

未だに凍りつく彼女を尻目に、章太郎は頭に手を当てながら

「あ～　すまん、完全に頭に血が上っていた……」

勇馬に返すのだった。

「本当だよ……　昔よりはまともになったけど、まだ沸点低いんだから」

「と言ってもなぁ、マジ切れしてない分ましだと思うんだけど……」

「当たり前だよ！　『兄さん』がマジ切れしたらこの家無くなっちゃうよ！！」

「え？　兄さん？　主様どういう……」

「むっ……　だからこそコンスタントに切れる事によってそれを回避するという方法をとっているんだろう！？」

「お主！　兄さんとは……」

「何だよそれ！？　どういう理屈！？」

「主様！　妾の話……」

「馬鹿野郎！！　借金は小まめに手堅く返済するのと同じだろう！？」

「知らないよ！！」

「ええい！　いい加減に妾の話を……」

「「うるさい黙ってろ！！」」

「ひぃ！？」

二人の言い争いに果敢にも割って入ろうとするもさっき以上の裂帛を喰らい彼女は口を噤むしかなかった。

そして、また殴り合いの喧嘩に発展しようとした時、とうとう最終兵器が起動しやっと話が進むのであった。

……

……

……

勇馬が安寿を寝かしつけ、章太郎はあらためて白姫の話を聞くのだったが……

「頭……　大丈夫か？」

章太郎の開口一番はこれだった。

「失礼な！？　心配されるような事は言っておらん！！」

「……　行き成り『救世主たる力を持った主に会うために異世界から渡って来た』って言われたら誰だって正気を疑うぞ？」

「何を言う！　妾は正気で間違った事は言っておらぬ！？」

「でもな～」

行き成り話されたおファンタジアな話に戸惑いながら額に手を当てる章太郎は勇馬に「お前はどう思うよ？」と話を振る。

「あ～　兄さん、あながち作り話じゃないかもしれないよ」

「……へ？」

「いやね？　部活から帰る途中の事なんだけど、神社の方から違和感を感じてさ……　『何だろうかな』と思って行ってみたら……空間が歪んで其処から光がさしたと思ったら」

「この子が居たんだよね」と話す。

しかし、その顔は『俺、何言ってんだろ』という色を表していた――　が割り切ったのか話を進める。

「それで極め付けがさ……　まぁ、その場を目撃した俺は当然呆然としたわけなんだけど、この子――　白姫と目があった瞬間、頭に電撃が走った感じがすると同時に色々流れ込んできたんだよ」

「流れ込んできた？」

「……うん」と言ったきり勇馬は口を噤んで何も話そうとはしない……　その様子に痺れを切らした章太郎は内容を問いただそうと口を開くが

「よすのじゃ」

白姫に止められる。

「主様は妾の記憶をみたのじゃ。戦乱の世、人が争い、世は荒れ、獣魔どもが跋扈する世界と主様と妹君の御宿命……　救世主となり天下を治めるというな」

「どういうことだ？」

章太郎は唯一事情を知るだろう白姫に尋ねる――　が

「お主が知る必要はない」

ばっさりと切り捨てられた。

「ちょい待て……　何で俺が知る必要が無いんだ？」

言葉こそ静かではあるが章太郎の雰囲気は真逆――　ビリビリとした空気が出来ていた。

「関係無いからに決まっておろう」

だが、白姫はお構いなしに言い放つ。

「関係ないとはなんだ！　関係ないとは！！　俺はこいつ等の兄貴だ、関係ないわけがなかろうが！！」

「兄と言っても血が繋がっているわけがないのであろ？　そのようなものになぜ説明をしなければならぬのだ？」

「っ！？　てっ手前ぇ！！」

怒りに顔を歪めながら白姫に怒気をぶつける章太郎。　しかし、白姫は先ほどと異なり怒気を受けても踏みとどまり言葉を続ける。

「……　っ、そもそもこれは妾達の問題なのじゃ、お主をそのような事に巻き込むわけにはいかぬのだ」

「巻き込むって……　お前は勇馬と安寿に何させようとしているんだ！？」

「先ほども言ったろう……　天下を治めていただくとな」

「天下を治める」その言葉に章太郎の脳裏にとある言葉が浮かび――

「戦争……？」

確認するように口に出す。

「左様。今、妾の国は動乱が広がっておる。　力を落としてしまった天皇家と将軍家――それに反して各大名は次代の覇権を握らんと力をつけ、国外からも不穏な空気が漂っておる――　平穏だった国の未曾有の危機と言っても過言ではないだろう……　だからこそ主様たち……　『覇将』と『姫巫女』の血を引くお二人の力が必要なのじゃ。　一番は先代様、英馬様と美月様がご存命なら良かったのだがな」

「まっ待て！　何でお前が先生や美月さんのことを知ってんだよ！？　それに『覇将』やら『姫巫女』やら……　わけわかんねぇよ！？」

「さっき言ったろう？　関係ないと」

初めて聞かされる事に章太郎は動揺しながら勇馬に目を向ける――

勇馬はそれから逃げるように目を逸らした。

章太郎は気付いた

「知って……　いたのか？」

勇馬は全て知っていたと。

「……　知っていたというより思い出したんだと思う」

重そうに口を開く。

「父さんたちが死ぬ前にこの話を聞かされたんだ……　『自分達はこの世界の人間ではない』、『平和になった世界では、自分たちの力は強大すぎたため世界を渡った』、『いつか、もしかしたらあっちから使者が来るかも知れない』って――　もちろん俺も訳がわからなくなったさ……　そしたら母さんが手を振りかざして――」

「暗示じゃな、強力だが条件か時期が来れば解けるものだったのだろう」

「流石は先代の姫巫女」白姫が納得したように頷き……　「主様」と勇馬に話しかける。

「そして今が『時期』なのですじゃ……　早く準備をしましょうぞ？　確か道場があると言ってましたの……　そこで『世渡りの儀』をおこな――」

「黙りやがれ！！」

章太郎の怒声が響く。

「戦争だぞ！　人が大勢死ぬんだぞ！？　そんなところにお前を……　ましてや安寿を行かせるわけねえだろ！！？」

「今更何を……　それに主様が来なければ民草がどれだけ命を落とすと思っているのじゃ！？」

「行かせない」という章太郎に白姫は怒気――　いや、殺気すら漂わせて声を張り上げる。

「そんなのそっちの都合だろうが！？　俺にとっちゃ見知らぬ人間がどうなろうと知ったこっちゃねえわ！！」

「貴様……！！」

一触即発な程に二人の間の空気が不穏になっていく。

「兄さん……」

水をさすように勇馬が口を開く。

「勇馬！　お前も言ってやれ！　このままじゃ――」

「兄さん、俺行くよ」

「は？」

章太郎は理解できなかった……　酷く動揺しながら――

「何を言っているんだ？」

聞き間違いであって欲しいと願いながら再度口を開く――　しかし……

「俺行くよ」

真っ直ぐ視線を返しながら勇馬はそう言うのだった。

「なっなんで……　運命って奴だからなのか！？　先生達にそう言われたからなのか！？」

「違うよ」

「それじゃなぜ！！」

「俺にしか出来ない事だし……　それに――」

一旦言葉を切ると一息吸い勇馬は章太郎に向かい――

「兄さんの弟だから」

と言ったのだった。

「なにを……」と章太郎は口を出そうとするが勇馬に阻まれる。

「悲しい事があっても底抜けに明るくて俺たちを励ましてくれた兄さん……、人に騙されても馬鹿みたいにお人よしで人を信じる事を教えてくれた兄さん……、自分の信念や意地を貫ける強さを持っててていつも守ってくれていた兄さん……」

一言、一言、大事そうに勇馬は言葉を紡ぐ

「俺も安寿もそんな兄さんの事が大好きなんだ……　だから、兄さんが誇れるような人間になりたいんだ……　だから……　俺行くよ」

涙目になりながら勇馬は章太郎に言葉をぶつけた。

勇馬の意思を感じると章太郎は俯き……

「安寿は……　どうするんだ？」

声を搾り出す。

「ごめん、兄さんにまかせっきりになっちゃうね……」

「馬鹿やろう……！」

二人にやり切れない雰囲気が漂う……　しかし――

「なりませぬぞ！？　主様！」

「なっ！？」

「えっ！？」

白姫の慌てたような声がそれを追いやる。

「先ほども妾が言ったように、あちらの世界は未曾有の危機……もはや主様の力のみではどうしようもありませぬ！？　心苦しいのですが妹君のお力も必要なのです！！」

「安寿も連れて行く」白姫はそう言ったのだ。

「だっ、だけど、安寿は……」

さすがにそれはと言った様に勇馬は返す。

「お気持ちは解る！　しかし、『覇将』と『姫巫女』の力は一対……　妹君もお連れするしか――」

「ふざけんなよ」

説得しようとする白姫の言葉は静かに章太郎の声に消された。

「勇馬は男だ……　こいつが決めたからには認めるしかねえ――だけどな！　安寿は別だ！　あいつを連れて行くのは断じて認めん！！」

「そうだよ……　安寿はまだ子供だぞ！？　そんな子供を連れて行くわけにはいかないんだ！！　兄さんとここで暮らしていた方がの子の為なんだよ！？」

章太郎と勇馬の声が響く……

それを聞いた白姫は一瞬悲しそうな顔をすると――　何かを覚悟した表情をして勇馬に近づき……

「御免！」

「ぐあっ！？」

勇馬の頭に手を添えると光が爆ぜると共に勇馬を気絶させたのだった。

「てっ手前！　勇馬に何を――」

「気絶させただけじゃ問題ない」

白姫は勇馬の身体を指先から出した丸い球体の中に入れ首飾りに収納した。

（実力行使か！？）

きっとこのまま安寿も連れて行くだろう……　相手の行動からそれが読み取れた章太郎は安寿が眠る部屋へ続く階段の前で身構え……

（女を殴り飛ばす趣味は無えが！）

構えた左拳が一瞬ブレて白姫に襲い掛かるが――

（弾かれた！？）

白姫に届く前に見えない壁のようなものに邪魔される。

「無理じゃ、お主がいかに力自慢だろうと妾の障壁は崩せんぞ」

「っるせぇ！！」

叫びながら続けて左を放つ。

ダン

ダン

ダン、とコンスタントに音を立てて拳は壁に着弾する。

相変わらず壁に阻まれて白姫にダメージの色は見えないが、衝撃ぐらいはあるらしく一撃ごとに歩みを止める。

「唯の拳だと言うのにここまでの衝撃だとは……　障壁が無ければ

妾も危なかったぞ」

「はっ！？　ビビッたんなら勇馬を置いてさっさと帰りやがれ！！」

「それは出来ぬ相談だな」

何処か余裕そうな顔で白姫は返す。

（その顔……）

章太郎は大きく構えを変える――

自分の背中が見えるほど身体を捻り右拳に力を込めると……

（これを喰らってもしていれるか！？）

「だあああああああ！！！」

右拳を白姫に叩きつける。

ドゴォ！！

相変わらず右拳は壁に阻まれていたが、これまでのものとはあきらかに違う一発だった。

拳がめり込んでいるのだ――　まるでビニールの膜を突くように壁が拳の形をしながら内側に押し込まれていく。

「なんと！？」

これには白姫も表情を崩すが――　壁の抵抗力に段々と自分に近づく拳の速度が遅くなるのに気付き安堵の息をつく。

しかし、この男は諦めていなかった。

「まだじゃあああああ！！」

最後の一押しを受けて拳は一層勢いを増す。

「しまっ！？」

声をあげる前に自身の身体が宙に浮くのを感じた白姫――　そのまま彼女は……

「ぐぁ！？」

台所の壁を突き破り中庭に弾き飛ばされるのであった。

砂埃が舞う中、章太郎は中庭へ足を進める。

その姿はまさに鬼人という言葉が当てはまるだろう。

しかし――

「驚いたの……　炎龍の火炎弾すら耐え切る妾の障壁を破壊するとは」

其処には、何食わぬ顔で白姫が立っていた。

「驚いたのはこっちだよ……　まさかアレを喰らって平気そうな顔

をしているなんてなぁ」
章太郎の右拳は必倒の一撃である――　それを耐え切った彼女に章太郎は驚きの声をあげる。
「……　お主は一筋縄でいかぬ様じゃ――　だから」
「本気でいかせて貰うぞ？」白姫はそういうと瞳を閉じ集中し始める――　空気が変わった。
濃厚な何かが白姫を中心に渦巻いている。
それが、ビリビリと肌を刺すのを感じながら章太郎はいつでも動けるように体を整える。
「この霊力の渦にも耐えるとは……　おぬしは一体何者なのだ？」
「はっ！　こちとら生まれてきてからずっと唯の人間をやってるっちゅーんじゃ！」
「ククククッ、まぁよい。どっちにしろこれで終わりじゃからの！！」
渦が一気に収束し、白姫の首飾りが煌き始める。
「我、龍族が白姫――　我に従いし六竜の一……」
白姫が何かを呟くと同時に首飾り――　正しくは首飾りの珠が光を一層強く放つ。
赤、青、緑、黄、白、黒――　それぞれ光る中で一回白い珠を手に

とる――　が黄色の珠がより一層強い光を放っているのに白姫は気付く。

（何じゃこれは？）

今まで何度も竜召喚を行っていたが一つの竜がここまで主張する事は珍しかった。

（光竜（こうりゅう）を呼ぼうとしたんじゃが……　）

自身と最も相性のいい白玉を掴んでいたが一旦それを離し、黄玉を握り天にかざす。

「出でよ！　鋼の王――　鎧竜（がいりゅう）！！」

「なっ！？」

サングラス越しからでも感じる強い光。

暫く強く輝いていたが徐々に光が収まっていく……　そして完全に収まった時其処には――

「ハ、ハハ……　何だよこれ……」

体長は六メートル位だろうか、身体は鱗というより黒い体毛に覆われているが四肢や尾、頭に金属の様なもの張り付いている、相貌は赤く輝いており章太郎をじっと見ている。

竜というには鎧を着た獣に近いが……　その存在感は圧倒的だった。

「やはり、世界が違うからか本体は呼び出せんかったか……」

額の汗を拭きながら白姫はそう呟く。

「これで、全開じゃないってのか？」

「そうじゃ、本体ならより大きくより強靭なんじゃが……　それでも十分な強さを誇るからのう――　しかし、お主が相手じゃ念のため妾も攻撃に参加しようぞ」

白姫はそう言いながら右手に火を灯し、左手にパチパチと帯電し始めた。

（クソッタレが！！）

その光景を見て章太郎は悪態をつく。

（でっかいのが前衛で、あの女が後衛といったところか……　めんどくせえなあ、おい！！）

やるしかない。

覚悟を決めた章太郎は身を小さくするように構えて足に力を入れる。

先手は白姫たちからだった。

鎧竜がその名に合わぬスピードで章太郎へ一気に詰め寄ったのだ。

「ＧＩＩＩＩＡＡＡＡＡＡ！！！」

「日本語でおKぇぇぇぇ！！」

肉食獣を思わせるスピードのまま鎧竜はその爪を章太郎へ振り下ろすが、間一髪章太郎は前転でその場を離れる。

チラリと今まで自分がいた場所を見ると、其処には三本の爪あとが残っていた。

（うわぁ……　マジ？）

その惨状に少し引いていると今度は違う方向から敵意を感じる。

「くらえぃ！！」

白姫が火炎放射器が可愛く思えるくらいの炎を放ったのだ。

「ちぃぃぃぃ！！」

体制を崩していた章太郎はそのまま炎にのみこまれるが……

「熱いわこんちくしょおおお！！」

右手を払い炎から飛び出してきたのだった。

「何度も聞くが……　お主本当に人間かえ？」

「何度だって答えてやるさ！！　２１年間人間やってましたが何か問題でも！」

（さっきの霊力といい妄の炎弾といい普通の人間が耐え切るとは思

えないんだがな）

そんな事を白姫が考えていると、今度が章太郎が近くにいた鎧竜に左拳を放つ。

だが――

「堅っ！？」

頭を狙ったらそれを覆う金属に弾かれてしまう。

（鎧竜って言ってただけはあるか！）

間髪いれずに鎧竜は身体を反転させ、金属をつけて重くなった尾で章太郎を横に凪ぐ。

「ぐほぉ！？」

手をクロスして受けたとはいえ直撃した章太郎はピンボールのように弾き飛ばされた。

「ＧＡＡＡＡＡ！！」

鎧竜は直に追撃で右手を振り下ろすが

「ＧＩＡ！？」

己の爪が二本の腕によって止められているが判ると驚いたような鳴声をあげる……　がそのまま押しつぶさんとして体重を乗せようとする。

「舐めんじゃねえぞ……」

しかし、この男に力勝負で挑むのは――

「畜生がああああ！！！」

愚の骨頂だった。

筋肉が異常なほどに肥大して鎧竜の爪を押し返していく。

そして、完全に体制が逆転すると章太郎は懐に潜り込み――

「おりゃああ！！」

腹部に右拳を叩き込んだ。

「ＧＹＡＮ！？」

鎧竜はあまりの衝撃にたじろぎ一歩下がる……　しかし、それはアウトだった。

「よっしゃああ！！」

サングラスをキランと光らせると章太郎は一気呵成に右拳を撃つ。

ドゴォ！

ドゴォ！！

ドゴォ！！！

と音の間隔はあいているがそれでも強力な一撃が鎧竜の腹部に入れられているのが判る。

このまま決着がつくかと思われたが……

「やらせんぞ！？」

白姫が何かを放つ。

「今度は何……　やべぇ！？」

放たれたそれを確認すると章太郎は必死で飛びのくと―　少し遅れて雷撃がその場を焦がした。

（今、あ奴……）

白姫が何かに気付く。

（弱点か！？）

もしそうならこの形勢を逆転できるかもしれない。

形勢は信じられないことに章太郎に向いていたのだ――

（人の身でありながら最弱状態といえ鎧竜を圧倒するとは……）

一瞬、白姫の脳裏に

（こやつならあちらの世界に連れて行っても……）

と浮かぶがすぐ捨て去る。

（ならぬ！　こやつは無関係……　妾らの都合に巻き込むわけにいかぬ！　それに……　主様が望んでおらぬ！！）

安寿の力は必須の為、勇馬の意に反し連れて行くしかないが章太郎は別である。

（主様と記憶を繋げた時飛び込んできたのじゃ……　主様がいかにこの者を大事に思っているのかを！！）

できる事なら一緒に居させてやりたい……　しかし、白姫の立場と世界の情勢がそれを許さないのだった。

（だからせめて……）

誤解されても、悪者なってもいいそれしか出来ない自分を不甲斐なく思うしか白姫にはできなかった。

一方章太郎は……

（やっべー　超やべー）

確実に消耗していた。

それもそうだ今まで戦ったことの無い相手……

気の抜けない戦闘……

そしてなにより……

（電気使えるなんてよおお！？）

自分の一番の弱点……　電撃を相手が使えるからである。

章太郎はほぼ弱点は無い。

打撃はよっぽどのもので無い限りダメージを負わないし。

刀剣や銃弾相手でも素人相手なら致命傷を負った事が無い。

炎や氷でもそうだ……　しかし、電撃だけには弱かった――

何故かは本人も判らない……　気付いたらそうだったのだ。

それこそ、コンセントの電気だけで身体がしびれるほどなのだ。

（こりゃロープレの鉄則をするしかねえ……）

狙いを白姫に定めて――

（後衛から潰す！！）

その場から駆け出した。

章太郎が動いたのを見て白姫と鎧竜も行動を起こす。

章太郎の矛先は真っ直ぐ自分に向いていると判った白姫は、その射

線上に鎧竜を滑り込まそうとするが――

（遅い）

章太郎の足の遅さに気が抜けそうになる……　が

（じゃが、あ奴の事じゃ……　何か策があってのことだろう……
そうでなければあの足の遅さで先手を取ろうとは考えないだろうて）

考えを改め、気を入れなおす。

前に説明したように章太郎の武器は人間離れした頑丈さと膂力である。

その反面か恐ろしいほど鈍足である、普通に走れば足の速い小学生に負けるほどなのだ。

そのためか、章太郎の戦い方は基本足を止めての殴り合いか取っ組み合いがメインであり得意なのである。

しかし……

（あと少し……！）

章太郎にはもう一つ得意な戦い方がある――

（後一歩……！！）

それは――

「っ！　いまじゃあああ！！」

白姫までの距離が約五歩になったところで章太郎の身体は一気に加速する……　いや加速と言うよりも爆発している。

まるで何かが爆ぜたような彼の足跡がそれを物語っている。

今の彼は全身が一つの銃弾になったような状態である。

弾丸チャージ――

このダッシュからの体当たりを見た人間の誰かは知らないがそう呼んだ。

その勢いのまま自身の身体をぶつけ、とどめに最大威力の右拳を炸裂させるのだ。

「くううらあああえええええ！！！」

章太郎が雄たけびをあげて白雪に襲い掛かる。

本来なら、章太郎の鈍足さに気の抜けた相手は、行き成りのギアチェンジに対応できずそのまま被弾するしかないのだ。

しかし、白姫は冷静だった。

（やらせん！！）

自分を障壁ごと確実に必倒しようとする脅威を目の前にしてとても冷静だったのだ。

黒玉を掴み闇竜（あんりゅう）の力を一時解放――

そして、鎧竜と自分の場所を確認し――

影を使って入れ替える……　それを章太郎が飛び込んでくる一瞬で行ったのだ。

（何！？）

章太郎が気づいた時はもう遅く、すでに白姫が入れ替わった後だった。

「チィ！」

舌打ちしながらそのまま身体をぶつける。

「ＧＹＡＮＮ！？」

鎧竜は衝撃に耐えれずその身を宙に浮かせ後方に弾かれてしまう。

後方に飛んでいく標的確認すると同時に章太郎は再度加速し――

右腕を振り上げその勢いのまま――

「貫ったあああ！！」

身体ごと突貫するように右拳を撃ちぬく。

拳はメリメリと音を立て鎧竜の身体にのめり込み……　その名前の特徴である鎧を破壊しつくすのであった。

「G……　A」

白目をむいて倒れる鎧竜……　暫くするとその身体が黄色の光になって消えていったのだった。

光は章太郎をすり抜け白姫へと向かう。

一瞬その光景に見とれていた章太郎だがすぐに気を取り直して、白姫に視線を向けた。

「まさか……　圧倒するだけで無くて倒してしまうとはな」

白姫が口を開く。

「ハンっ！！　伊達に鍛えちゃいないさ！　どうする？これでお前の前衛はいなくなってが！？」

「それでも妾は……　やらねばいけないのじゃ！！」

「その意気やよし！　大丈夫だ殺しはしねえ！！」

言い終わると同時に飛び込んでいく章太郎……　今回は最初から右腕を振り上げている。

対して白姫は障壁を展開して待ち構える。

（無駄だ！　そのまま――）

「撃ち抜く！！」

言の葉と共に章太郎は拳を振りぬく。
拳はさっきとは異なり勢いよく障壁を崩していく。
そして――
「獲ったあああああ！！」
完全に崩れた――　後は拳が白姫を打ち抜くだけだ。
「まだ終らぬ！！」
迎え撃つように両の手を拳に向かい出す白姫。
白姫の細腕で章太郎の豪腕を受けるのはどう考えても無理だろう。
章太郎は勝利を確信した。
しかし、章太郎は気付いていなかった――　白姫の手の中にある白玉を……
「鳴神（なるかみ）」
拳が手を破壊しようとする時、白姫は呟く――　すると拳は手を弾き飛ばすことなくピタリと止まり……
「ぐおおおおおおおおおおおお！！」
章太郎の身体を雷撃が走った。

稲妻とも思われる極太の雷光は脳天からつま先まで章太郎を打ち抜いていた。

「が……　は……　」

雷光は静まりパチパチと帯電している章太郎は黒くなった顔からこれまた黒い煙を吐き出し……

トサッ

膝を突き――

ズン

その身を大地に横たえた……

……

……

……

「終ったか……」

（賭けだった……　あと少し手を出すのが遅れていたら倒れていてのは妄だっただろう）

白姫は横たわる章太郎を一瞥し息があるのを確認すると……　家に向かい歩き始める。

ガッ

足に感じる違和感。

それを確かめるために目を向けると――　章太郎だった。

「意識が……　あったのか？」

白姫は言う。

それも仕方ない、いくら章太郎が頑丈とはいえ弱点だろう電撃を一般人なら即死レベルで打ち抜かれたのだ。

驚いている白姫を章太郎はうつ伏せになりながら見上げる……　同時に足を掴む手にも力が入るが先ほどの力強さは感じられなかった。

「ダノム……　ヅレデガナイデグレ」

雷撃の効果で麻痺してるのか、回らぬ舌で章太郎は哀願する。

「アイヅラバ、　ガゾグナンダ……　オデノ、ガゾグナンダ……」

先ほどまで烈火のように苛烈だった男が――

「フタリダゲノ……　ガゾクダガラ……　ダノム」

弱弱しく頼みかける。

「ヅレデがナイデグレ……」

白姫は瞼を閉じ……　章太郎の頭に手をかざすと――

「っ……　すまぬ」

震える声で微量の電流を流すのだった。

「アッ」

今度こそ意識をなくしたのかその顔を地に伏せる章太郎。

それを白姫は瞳に何かをためながらその場を去っていった……

……

……

……

翌日、園宮家の前では人だかりが出来ていた。

その中には警官も混ざっており、近くにはパトカーも止まっていた。
近所の通報で来た警官たちだったが全くをもって状況がわからなかった。
何かに壊された台所――
鋭利な刃で切りつけられたような跡や焦げている跡のある中庭――
そして、いなくなった兄妹――
これらの事を聞こうと残った男に話を聞こうにも、その男は――
「安寿ぅ……　勇馬ぁ……」
大火傷を負いながら、いなくなった妹のベットでの前で男泣きに泣いていたのだった……

序章　終節

大火傷を負った章太郎はそのまま病院に運び込まれたが……　持ち前の回復力で長期入院ではなく短期の入院となった。

日に日に回復していく章太郎――　しかし、彼の心は未だに折れたままだった……

様子を見て見舞いに来た人々は口々に彼を励まし元気つけようとしたが――

「――　すんません、でも今は何も考えたくないんす……」

こう返すだけで復活の予兆を見せないまま時間だけは過ぎるのだった。

……

……

……

「……ただいま」

誰もいない家に向かって章太郎は言う。

しかし、時計を確認すると終業の時間にはまだ早い……

「今日もやっちまった……」

一人呟く――

退院してから職場に戻った章太郎……　だが、彼は働ける状態ではなかった。

あの事があってから、心ここにあらずといった様で仕事中いつもはやらないヘマをし、注意されたというのに集中は続かず、また同じようなミスして……　心配した社長や同僚達に早退を進められるといったのを繰り返していた。

（俺、仕事続けられんのかな？）

自室のベットに腰掛けながら考える。

（無理……　だよな。　こんな状態では社長達に迷惑かけるだけだし……　第一――）

「働く理由無ぇし……」そう言って力無く笑った後――

「――　クソがっ！！」

拳を振り上げ自分の膝に落とす。

「クソが！　クソが！　クソがぁぁぁぁ！！」

叫びながら章太郎は自分に拳を振り下ろし続け……　今度は自分の履くニッカを指が白くなるまで握り締めた。

（情けねぇ……！！）

章太郎は自分には力があると思っていた……　自分の意地や意思を通し、勇馬達を守るだけの力があると……

しかし、今はどうだ？

面倒を見てもらった先生方へ恩を返す事が出来ず……　ならばと残された勇馬達の面倒を見ようと思えば……　それも果たせず。

自分の意思や意地だけでなく最も大切なものでさえ守る事が出来なかった。

（俺は……　俺って奴は！！）

「……情けない兄貴だっ！！」涙や鼻水で顔をグシャグシャにしながら章太郎は泣き続けた。

（会いたい）

ひたすらその一念を思いながら泣き続けた。

一人しかいない園宮家――

静かに響く男の嗚咽――

いつの間にか来ている朝――

これが勇馬たちがいなくなってからの章太郎の日常……　今日もこのまま終り、明日を迎える――　『筈』だった

「なんだ？」

夕闇に染まる部屋の中、章太郎は気付く――　自分の胸元から淡い光が漏れているのだ……　彼は、急いでそれを確かめるために服に手を突っ込む。

光の正体は巾着……　正しくはその中のものだった。

「これは――　なんで？」

（今までこんな事一度も無かったのに……）

章太郎は巾着中にある発光する珠を指先で摘む――　すると

「うお！？」

珠は章太郎が触ったのを確認したように明滅した後、目が眩むほどの光を出し始めたのだ。

「一体、何が！？」

サングラス越しからでも網膜を刺激する光に苦戦しながら叫ぶ。

光は章太郎の叫びに呼応するかのように一瞬強い光を発し一気に収

縮し――

「止まった？」

突然治まった――　辺りは静けさと夜の暗さを取り戻したかに思えたが……

章太郎は一つの異変に気付く。

さっきまで光を放っていた珠のところにナニかがいたのだ。

章太郎は慌てて部屋の電気をつける。

部屋が人工的な光に照らされると同時にナニかの正体があらわになった。

其処にいたのは――　あの時対峙した鎧竜と呼ばれていたものだった……　しかし決定的に違うものがある、それは大きさだ。　あの時の鎧竜よりも明らかに小さく、小型の室内犬程の大きさなのだ。

「……っ！？」

それが目を開き章太郎を見据える、　鎧竜とは違う琥珀に近い黄色の相貌が章太郎の方に向くと同時に彼は警戒を強める。

鎧竜らしきものは章太郎のその姿を確認すると、人間臭く一息つくような仕草をすると……

「そこまで警戒しなくてもいい主（あるじ）よ……　私は主に害を与えるつもりは無い」

と口を開くのだった。

「は？」

「だから言ってるだろう、害を与えるつもりは無いと」

章太郎の間抜けな声と、鎧竜もどきの低く落ち着いた声が聞こえた後……

「しゃっ……　喋ったあああああああああああ！？」

章太郎の絶叫が部屋を震わせるのであった。

……

……

……

「落ち着いたか？」

「あっ、ああ。　悪ぃ、取り乱した」

「まぁそれも仕方ないだろう、こちらの世界で私のようなものが喋れば驚くのも無理は無い」

一時期混乱の極みだった章太郎も時間が経つにつれ落ち着きを取り戻していた……　が

（結局、こいつは何だ？）

と極めて当然のことを考えていた。

それもそうだ、目の前で不思議生物が日本語を話しているのだそう思うのも仕方ない――　当然のことを今考えていることから、章太郎の混乱具合がとてつもない物だったというのが判る。

対して、鎧竜もどきは泰然としながら章太郎に視線を向けていたが、唐突に口を開いた。

「私の事が気になるのか？」

「へ？」

「いや、霊力を通じて主の思念が届いたのでな？　しかし、主によって呼ばれたというのに私の事が判らぬとは――」

「いや！　いやいやいや！！　ちょっと待て！？　俺が呼んだ？　それにパスって……」

聞きなれない言葉に慌て出す章太郎を見て、鎧竜もどきは

「……ふむ、主は本当に何も知らないようだな……　ならばいい、この際主の疑問に答えるとしよう――　私の答えられる範囲でな？」と話すのだった。

それを聞いた章太郎は気持ちを落ち着かせるために数度深呼吸を行い……　冷静な様子で鎧竜もどきを正面から見据え――

「それじゃ……」と質問を開始した。

「まず、はじめに聞くが……　お前は誰だ？」

「私か？　言ってしまえば主の持っていた宝珠そのものだな」

さっそく章太郎の頭に？が浮かぶ

「宝珠って……　名前を聞くと大層な物みたいだけど……　そんなもん俺持ってたか？」

「何を言っている？　これのことだぞ」

「ほれ」と前足で己の額を指し示すとそこには、さっきまで光を放っていたビー玉――　宝珠が額に埋め込まれていた。

「確かにこれは俺の……　だけど色が違うぞ？」

さっきまで光を放っていたのは青……　しかし、今鎧竜もどきの額に埋め込まれているのは黄色に光っている。

「これか？　今までどのような色だったのか私には判らないが……

多分この身体の元になったモノの霊力が原因だろう」

「霊力って――　あれか？　ゲームに出てくる魔力みたいなものか？」

「あながち間違いではないな……　名前の違いこそあるがこの二つは似たようなものだからな。　主に覚えはないか？　霊力の残照か何かに触れたことを」

（……　あのときか？）

確かに章太郎は鎧竜を倒した時、黄色い光が身体を通過している。その時に宝珠は光を吸収していたのであった。

「という事は――　お前はあの女について何か知ってんのか！？」

章太郎は鎧竜もどきに詰め寄る。

「すまないが……　主の言う『女』については私にも判らない。私の身体を構築する霊力の大半は主のものだからな、記憶もお前に関するものしかないぞ。　しかし、この身体の元――　鎧竜だったか。かなりの知恵者だったのだろうな、おかげでその者達の世界や常識ぐらいなら少しはわかるぞ？」

「知恵者って……　俺が戦りあった奴はなんというか……　ザ・獣って奴だったぞ？　そんな理性があるなんて思え――　あっ」

『本体は呼び出せなかった』女――　白姫がそう言っていたのを章太郎は思い出す。

（それじゃ、理性がないように見えたのも頷けるか？　本体はもっと頭がいい奴なのかも知れんし……）

「……　どうかしたのか？」

考え込む章太郎に鎧竜もどきは尋ねる。

「いや――　頭の中で整理してただけだ……　」

しかし、深く考え込む章太郎の様子を見て鎧竜もどきは

「ふむ……　まだ、疑わしく思っているのなら色々試してみるか」

「色々って……」

「うむ、さっきも言ったように私の身体は八割主、二割鎧竜で出来ているからな。　知識と外見こそ鎧竜のもの受け継いでいるが、それ以外は殆ど主と同じだからな。　霊力を通じれば五感や記憶を共有したり、思念を送ったり出来るのだ」

「少し待ってろ」と鎧竜もどきは集中するように目を閉じる。

すると章太郎は一瞬違和感を感じた後、自分の体に起きた変化を感じ取った。

「おぉ～　すげえ……　片目がお前の視点になってやがる」

片目では目を瞑る鎧竜もどきが映っており、もう片方ではこちらにサングラス越しから視線を向ける自分の姿が映っていた。

（……　なんか奇妙だな）

左右の目で異なるものが見えているため違和感は強いものだろう。

そんな事を章太郎が考えていると唐突に声が聞こえる。

『仕方ないだろう、片方は私の目なのだからな』

しかし、耳から声が届いたというよりも頭に響いたという表現が正しい。

（これが思念を飛ばすって奴か……）

『そうだ、まぁ念話とも言うがな。　ちなみに私を通して第三者に念話を送る事も出来るぞ』

（なんという携帯いらず……　ん？　あっちじゃこれがデフォなのか？）

『そうだな。しかし、あっちの世界では専用の道具が無ければここまで鮮明に送る事は出来ないがな。　いったん戻すぞ』

鎧竜もどきがそういうと章太郎の目と耳が元に戻る。

頭に残る気だるさを消すように章太郎は「あ　゛～　」と軽く首を回す。

「ふむ、パスはちゃんと繋がっているようだな」

「違和感が強くて気持ち悪いな、これ」

「任意で切り替える事が出来るからな――　慣れるまで使っていくしかないだろう。　とりあえずこれで私というものがわかったと思うのだが？」

「いやいや、今のだけじゃお前の事を生きている携帯ぐらいにしか思えんて」

顔の前で手を立てて横に振り章太郎は言う。

「まだ、信じないか……　ならば記憶に関してならどうだ？　主と変わらぬものを持っていると言えるぞ？　手始めにそうだな……主の記憶の中でも厳重に封印してある『中学時代』の記憶から……」

『中学時代』その言葉を聞いた章太郎の脳裏にいくつかの単語が思い浮かぶ。

邪気眼――

右手に巻いた包帯――

必殺技的な漢字羅列に無理やりカタカナのルビを振る――

よくわからない詩と歌詞――

大人に反抗する俺カコイイ――

（いかん……　地雷が多すぎる！！）

自分の黒歴史を暴露される前に鎧竜もどきを止めようとする。しかし、章太郎の行動を無視するかのように鎧竜もどきは口を開く。

「『天下布武』について――　っ！？」

「まてええええい！！？」

核爆弾級の地雷を引き当てたのだろうか。

『天下布武』という言葉を聞いたと同時に章太郎は鎧竜もどきに一気に詰め寄り首を絞める。

当然もどきは「何をする！」といった風に章太郎に視線を向ける……　が

「オーケー　オマエノイッテイルノハヨークワカッタ」

と口にして、言外に「これ以上喋ったら……　わかるな？」という意思を章太郎から感じ取ったもどきは首を縦に振るしか出来なかった。

……

……

……

「あ～……　とりあえずお前がその宝珠って奴なのは判った。　ん

で、その宝珠って何よ？」

「うっうむ……　いいか宝珠とはな、あっちの世界におけるエネルギー結晶体でありエネルギーを溜めたり放出したりできるものだ」

「この世界での電池みたいなものか？」

「間違いではないな。　程度の低い宝珠ではそれが限界かもしれないがな……　しかしある程度以上の格を持つ宝珠になると、術の媒体や持ち主に適した武器や防具になったりするのだ。　もちろんそんじょそこらの武器では話にならんほど高い力を持つぞ？　そして私の額にあるものはその中でも神代から存在している特上品といっても過言ではない」

「神代って……　古事記とかに出てくる神話の世界の事か？」

鎧竜もどきの言葉に頭をボリボリと掻きながら章太郎は尋ねる。

「うむ、まぁ実のところ神の存在は今だ確認されてはいないがな……　あちらでは様々な力の結晶というのが通説になっている」

「様々って……　もしかして属性的なものがあったり？」

「そうだな、自然界における力を持った『火』や『水』等の宝珠が存在するぞ。もちろん、宝珠の格と使う人間の力量によって発揮する効果は異なるがな」

「（厨学生が好きそうな話だなおい）まぁ……　これがどんなもんかは何となくわかったけど……　俺が持ってた奴はとんでもなくレアなんだろ？」

「そうだ、私のような擬似生命を作れるということは宝珠の格が最上級である事の現われだ。　国によっては国宝級の扱いになってもおかしくないぞ」

「んじゃ何でそんなもん俺が持っているんだ？」

その言葉を聞いた鎧竜もどきは首をかしげて何か考え、暫くすると「知らん」と真顔で答えるのであった。

「って知らないんかい！？」

思わず章太郎は突込みを入れるのだが……　入れられた本人（？）は困惑していた。

「いや、知らないわけではないのだが……　頭に靄がかかったようで思い出せないのだ」

「自分で聞けと言っといて……」

「仕方ないだろう、主に関する記憶が頭にあるといっても、本人すら曖昧な記憶を生まれたばかりの私が覚えているはずも無かろう？」

「思い出す可能性はあるのだがな」そういうと鎧竜もどきは目を瞑り、頭を軽く横に振る。

その様子を見た章太郎も「そうか……　思い出すしかないか」としか言葉を紡げなかった。

暫く沈黙が続くなか章太郎が唐突に口を開いた。

「なあ？」

「ん？」

「まだ聞きたいことは沢山有るけど……　とりあえず一番聞きたい事を聞くぞ？」

「なんだ？」

「さっき言ってたよな？　『俺に呼ばれた』ってあれは――　どういう意味だ？」

その言葉に耳をピクリと一瞬反応させると、鎧竜もどきはゆっくりとその黄みがかった瞳を章太郎に向けて言った。

「『会いたい』……　そう願っただろう？」

「……ああ、でもそれは――」

「判っている、主が二人に会いたがっているのも、今どういう状況なのかもな……」

「……」

「場所はわかっても、どうやって行ったらいいのか解らない……
どうしたらいいのか判らない……　かなり厳しい状況だと――」

「解ってるっ！！」

ダンと音を鳴らし、章太郎は立ち上がる。

「お前が言ってんのはよく解ってる――　解っている！！　あいつ等がいなくなってからずっとどうすればいいのか考えていたさ！！」

それは、感情の爆発。

「でも、出た答えはどうしようも無い現状とあいつ等がいないっていう現実と自分（てめえ）が不甲斐ないって事だけだよ！！」

現状への怒りと、事実への怒り……　何も出来ない自分への怒り。

「だけど、だけどよぉ……　」

俯きながらも言葉を続ける。

「諦め切れねぇんだよ……　認められねぇんだよ……」

それは全て――

「俺は――」

男の――

「あいつ等――　勇馬と安寿に会いてぇんだよぉ！！」

魂の言葉だった。

「……」

もどきは口を開かず真正面からそれを受け止める。
カッチコッチと時計の秒針が音を立てて進む。しかし、沈黙しながら対峙する一人と一匹の作り出す空気によって彼らの時間の感覚は薄れる。
一分か――
十分か――
もしくは一時間か……
曖昧となった時間の流れは――
「私は……」
一匹の言葉によって再び正常に流れ始める。
「私は……　その願いを叶えるために誕生したのだ」
「どういう――　意味だ？」
章太郎の問いかけに答えず、代わりに鎧竜もどきはその場からトコトコと移動し始める。
「おい、どこに――」
「いいからついてこい」
「行くんだ」と章太郎が言い終わる前に鎧竜もどきは首だけ向けて

そう言うとまた、トコトコと歩き始め……

「……」

章太郎はその後ろについていくのだった――

……

……

……

「ここだ」

部屋を出て数分――　目的地の前でもどきがその歩みを止める。

「ここって……　道場？」

「そうだ。とりあえず戸を開けてくれないか？　感覚で解るが眼で確認しておきたい」

「おっおう」

言われた通りに道場の戸を開くと――

「――っ！？」

闇色に染まった場内――　しかし、窓からさす月明かりに僅かばかりに反射し煌く何かを感じたのだ。

一歩足を踏み入れる。

ギィと床が軋む音を感じながら一歩ずつ、一歩ずつそれに近づいていく。

そして道場のほぼ中心まで歩き……　恐る恐るその『何か』に触れようと手を伸ばし指先に触れた瞬間――

光が生まれた。

青白く光るそれは連鎖のように広がって行き道場内を光で染めていく。

そして光はゆっくりとだが道場の中心に渦巻くように流れており、その終着点はより強い光の渦となって収束していた。

「やはりまだ残っていたか」

道場内の光景に呆然とする章太郎の後ろから声がした。

「これは……　一体？」

そういいながら声の主――　もどきに章太郎は今だ呆然としたまま

尋ねる。

「これは霊力の流れだ」

「霊力の流れ？」

「霊力は生物が保有しているものと自然が生み出すものの二つがあるのだ、ここでは前者をA、後者をBとするぞ？　Aを使って何らかの事象――　まぁ霊術だな、これを起こすとAの霊力にBの霊力がつられて場に流れができるのだ。　この流れを力場といってな、本来なら力場はすぐ消えてしまうのだが――　それは普通の術の場合でな？　大規模な霊術になると力場が長期間残るのだ。　ふむ、見たところこの力場は形成されてから一週間程と見たぞ」

ゆっくりと流れる光を見ながらもどきは説明する。

「ん～　ようは力場って言うのは――　流れるプールの水流みたいなもんか？」

「主の身近なもので例えるとそれが近いかもな」

「何となく判ったけどよ……　流れるプールには流れを作る機械があるから水流が出来てるんだぜ？　機械にあたる霊術なんてもん俺はもちろん、勇馬も使ったことが無いんだぞ。　なのに何でウチの道場で力場が起きてんだ？」

？を頭に浮かべながら章太郎は思ったことをもどきに聞く……　しかし、それを聞いたもどきは呆れたように息を吐き出し。

「鈍い奴だな……　」

一言呟いた。

「んなっ！？　行き成りなんだよ！」

もどきの言葉に憤慨する章太郎……　まぁ彼としては思ったことをそのまま聞いただけなのに馬鹿にされるとは思わなかったのだろう。

「誰が主の身内でこんな大霊術を使ったと言った？　霊術を使わない、知識も無いこっちの世界の人間がこのレベルの霊術を起こすなんて無理に決まっているだろう……　よく考えろお前の記憶の中……　それも極最近のものに答えがある」

「答えって――　ん？（こっちの人間じゃ――　霊術の事を知っているあっちの人間ならどうだ？　一週間前から――　一週間前は俺がやられた日……　その日、俺の近くで霊術って奴を知っていた奴は……）もしかしてこれは……！？　」

何かに気付いた章太郎を満足そうに眼を細めるともどきは言葉を続ける。

「そうだ。この力場は主を気絶させた、白姫とやらの世界転移の跡……　この力場の指向性を調整し霊力を補ってやれば――」

「世界を……　渡れる？」

「そういうことだ。しかし、世界転移は大霊術……　そう易々と起こせるものではない。　偶々ここには力場があり、ギリギリではあるが行使するには問題無い霊力があるだけなのだ……　世界を渡ったら戻るのは難しいだろう……　だから、よく考え――　主？」

鎧竜もどきはそう締めくくろうとした時、章太郎の様子がおかしい事に気がつく。

拳を力強く握り締め、身体を微弱に震わせ、顔を俯かせている。

（章太郎の身に何か起きたのか？）

そう思ったもどきが声を掛けようとした瞬間――

「いよっしゃあああああああああああああああああああああああああああ！！」

上体を仰け反らし、雄たけびのような章太郎の声が爆発するのだった。

ここ数日間の鬱憤を晴らすように声が響く、声だけだというのに道場の床や壁がギシギシと軋む。

そのような声――　いや音波攻撃を間近で喰らったもどきは……

「～～～！？！？」

耳を押さえて床の上を転げまわっていた――　映像だけなら小動物が床の上でじゃれている様にしか見えないが……

「っ！？　わっ悪ぃ！　あまりのことに思わず全力で叫んじまった！」

「――っ　よっ喜ぶのは構わないがもう少しボリュームを下げろ」

「……正直すまん」

耳を気にしながら話す鎧竜もどきに章太郎は気まずそうに謝る。

「とにかく……　その様子じゃ主の気持ちは決まっているみたいだな。　だけど本当にいいのか？　」

鎧竜もどきは言葉に出さないが言外に『帰って来れないぞ』と瞳で伝える。

そんな鎧竜もどきの瞳を見て、章太郎は……

「かまわんさ」

とニヤリと笑いながら。

「この世界に未練が無いわけじゃないが……　あいつ等に比べりゃ安いもんだ。　だから――　俺を連れて行け……　あいつらの所にっ！」

言い切った。

「解った……場の指定と調整で二～三日程準備が必要だ。　発生して少し時間が経っているからな、念入りにする必要があるため私はこれから調整に入る」

そう言って鎧竜もどきは章太郎に背を向けトコトコと道場中心まで歩み寄ると、力場を形成する光を操り始めた。

「……すまんな」

その後姿を見ながら章太郎は申し訳なさそうに呟く。

「言っただろう私は主の望みを叶えるためにいるのだ……　残された時間でお前の成すべき事を済ませて来い」

鎧竜もどきはその言葉に顔を向けずに言葉だけで返し。

「応」と章太郎は道場を後にしようとするが――

「とっ、とと……　肝心な事を聞くのを忘れていた」

慌てて振り返るのだった。

「どうした？」

その様子を？を浮かべてもどきは聞き返す。

「いや……な、　作業中のお前の飯ってどうなるのかと思って」（ドッグフードとかでいいんだろうか？）

「私と主は言ってしまえば一身同体……　主が健康なら私も健康であり、主が死ぬ時は私が死ぬ時であるからな。　とりあえず、主が食事を取れば問題ない」

「そうか……　ついでにもう一つ大切な事があった」

「なんだ」

「何時までも『お前』って呼ぶわけにいかんだろう？　だから名前を聞きたいんだけど」

「私の名前か、……無いぞ」

「は？」

「私はまだ生まれたばかりだからな……　名前というものが無いのだ」

淡々と話すもどき、それを聞いた章太郎は一息つくと

「名前が無いねぇ……　しょうがない、俺がスペシャルでデンジャラスな名前を考えておいてやる」

笑いながら言うのであった。

「スペシャルでデンジャラスって……　まあいい、期待しないで待っている」

「つれない奴だな……　今に見てろよ？　俺のネーミングセンスに感動するお前の姿が目に浮かぶぜ」

そういうとノッシノッシと章太郎は道場を出て行くのだった。

そしてもどきは――

「名前か……」

力場を操りながら一人呟く――　その顔は表情こそ変えていないが

何処か楽しそうだった。

……

……

……

シトシトと雨が降る。

雨は綺麗に磨かれた石の怜悧さをより際立たせるように優しく降り注ぐ。

辺りを見渡せば同じく磨かれた石が等間隔に鎮座しており、それぞれ『〇〇家』と彫られている。

ここは、近くの寺にある墓地である。

勿論、雨降りであるため墓参りする人間はほぼいないに等しいのだが……　一つの墓石の前だけ傘をさす人影があった――　章太郎である。

顔こそいつものサングラスに隠されていたが、その格好は見慣れたタンクトップ、黒のニッカボッカ、地下足袋でなくスーツと革靴で

固められていた。

「先生、美月さん……」

『園宮家』と掘られた墓の前で章太郎は口を開く。

「色々報告する事はありますけど……　まずは、すみませんでした」

深く頭を下げる。

「先生達に恩返しのつもりで今まで必死こいてきましたが……　俺は、あいつらを守れませんでした……　その上、危険な場所に向かわせてしまって……　ホンと保護者失格っす。　その上、この数日間の体たらく……　恥ずかしい限りっす」

墓石に頭を下げながら深く、深く……　喋り続ける。

「だけど、それだけあいつ等の事が俺の中で大切なんだと改めて確認できました。そして俺は諦め切れないということも……　だから……　もう一度チャンスを貰えませんか？　また、兄貴として家族として胸を張れるように成りたいんす。　……一度失敗して、腐りかけた野郎の言葉ですから軽く聞こえるかもしれませんが――　了承して頂けたら幸いっす」

そこで区切ると章太郎は頭を上げる。

その表情はここ数日のものと異なり、覚悟と信念によって力強い雰囲気を醸し出していた。

「今度ここに来るのは何時になるか解りません……　もしかしたら

戻って来れないかもしれません。　……だけど、もし戻って来たその時は……　家族全員でまた来ます」

言い終えた章太郎は、墓石に軽く一礼するとその場を後にした――

その時だった。

『いってらっしゃい』

どこからとも無く男女の声が聞こえてきたのだ。

「えっ！？」

声の主に覚えのある章太郎はすぐに後ろを振り返る。

今聞こえたのは間違いなく自分の恩人達の声――　しかし、そこにあるのは今まで自分が相対していた墓石のみ……

（気のせいか？　そうだよな……　先生と美月さんの声がするわけ無いよな――　だけど……）

気のせいだろう……

幻聴だろう……

そう思いながらも章太郎は口元を綻ばせると――

「……　いってきます」

再度墓石に背を向けるのだった――

いつの間にか雨は止み……　雲の切れ間から日差しがさしていた……

「準備はいいな？」

激しく収束し明滅する力場の前で鎧竜もどきは章太郎に問いかける。

「おうよ。　必要なものは片っ端カプセルに詰め込んだし、挨拶も終ってるしな」

この数日間、章太郎は準備を進めると共に今までお世話になった人たちに挨拶に回っていた。

今まで助けてくれたご近所さんや、いろんな意味でお世話になった警察の方々……　そして何より一番章太郎達のことを気にかけてくれていた社長夫妻に別れを告げに回っていたのだ。

事情を知る彼らは章太郎の話を聞くと驚き、そして引き止めた。

それもそうだろう。少し前まで死人のような男が『家族を探すために旅に出る』と言いだしたら、それはもう富士の樹海で練炭コース

や線路へアイ・キャン・フライ等など……　翌日の新聞を飾る予兆にしか思えなかったのだろう。

特に社長夫妻は『思い直せ』、『早まるな』と懸命になって引き止めていたのだが――　章太郎の必死の説明に最終的には送り出してもらえたのだった。

その日の夕方――

『お前（めえ）の退職金だ』

社長はそういうと、ぶ厚い封筒を章太郎に渡す。

中身を確かめてみると中には今まで見たことないような大金が封筒に納まっていたのだ。

勿論、勤めてたかだか二～三年の正社員の額ではない。「多すぎる」と章太郎は、返そうとしたのだが夫妻は断固として受け取らなかった。

『いつでも帰って来い……』

社長室を出る時、背中越しにそう声を掛けられる。

夫妻の確かな愛情が章太郎の心に染みた……

『……』

口を開きたくても声が震えてしまい、いつ涙腺が決壊してもおかしくなかった。

だから章太郎は部屋を出る瞬間――

『――っ』

大きく一礼して会社を出たのだ。

退職金は章太郎が旅支度に大いに役立った……　余った分は知り合いに頼み家の維持費に当てて貰うことになった。

可能性は低いが――　また、帰ってこれた時のために……　そして、お世話になった人に改めて挨拶できるように……

「……」

章太郎は先ほど自分が鍵を閉めた我が家を振り向く。

ほんの数週間前までは騒がしかった家も今は人気を感じさせない。

自分の半生近くを過ごしてきた家……　その年月は彼にとって最も輝いていた日々だった……

「……っ」

万感の思いがこみ上げてくるが……

「……っ！」

飲み込み、改めてもどきに向き直った。

「だから、いつでも行けるぞ」

「そうか……」

章太郎の心情を読み取ったのか、もどきは一言呟いた後少し眼を瞑ると――

「説明するぞ」

と話を続けるのであった。

「力場を調整してわかったのだが……　やはり発生してから時間が経ったためか完全に調節できたとは言い切れない。　世界の座標は特定できたのだが細かい調整が出来ないなどの点が残ってしまった」

「でも、とりあえず行く事は出来るんだろう？」

「そうだな、　不安定で私にも何が起こるかわからないが……　時間軸や場所が少しばかりずれるぐらいの可能性がある程度かと思われる、世界移動するには問題は無いだろう」

「なら、問題ねぇ……　少しばかり離れていようが必ずあいつ等を見つけ出してやるよ」

章太郎は不敵に笑う。

「ならば、開くぞ」

章太郎の声を聞いたもどきは力場の渦に向き直りそれを操り出す。

すると、今までゆっくりと流れていた光は急速に速さをおびながら渦の中心に収束していく――

中心に向かう光が少なくなると同時に中心の光はドンドン膨張して行き、一瞬の明滅の後――

光が爆ぜた。

もどきと初めて遭遇した時のように激しい光が押し寄せてくる。

サングラスの効果を無視するほどの光に章太郎は目元を手で隠しながらそれが収まるのをひたすら待つ。

もどきの時と異なり光は徐々にその勢いを失い……　中心に淡く光る扉のようなもの残して治まったのであった。

「これが、世界移動の扉だ……　主よ、再度聞く――　覚悟はいいか？」

扉を示しながらもどきは再び章太郎に尋ねる。

「当たり前だ。　俺はもうあんな思いは御免だからな……　だから頼むぜ？　『バディ』？」

「『バディ』？」

章太郎の『バディ』という言葉に反応するもどき。

「言っただろう？　名前を考えてやるって……　お前と俺は一心同

体らしいからな、これを表すとしたら相棒(バディ)しかねえだろ？」

「おれにしちゃぁ　ナイスネームだと思うんだけど」ドヤ顔を決めて胸を張る章太郎。

それに反して、もどきは呆れたように――

「まさか、本気で考えてくるとはな……」

口を開く。

「……　何だよ問題でもあんのかよ？」

渾身の出来だった為に、相手の反応があまりにも薄かった章太郎は肩透かしをくらう。

「いや、問題ない。　その名前使わせてもらうぞ主――　いや、『章太郎』」

「へっ？」

「ふむ、お前は主と呼ばれるたびにどこと無く嫌そうに見えたのでな……　せっかく相棒という意味の名を貰ったのだ名前で呼んでみようと思ったのだが……　どうだ？」

表情を変えないままもどき――　バディは章太郎に尋ねると章太郎は軽く笑いながら。

「ククククッ　オーケー、そう呼べや……」

と了承するのであった。

「何故笑う？」

「いや、堅そうなお前が俺を名前で呼ぶなんて思わんかったからな……」

「失礼な……　私の元はお前だぞ？　ユーモアぐらい理解している」

「わかった、わかった……　頼りにしてるぜ相棒（バディ）？」

「任して置け、私もお前をこき使うからな覚悟しておけよ相棒（ショウタロウ）？」

そういうとバディは跳躍して章太郎の肩に掴まる。

それを確認した章太郎は――

「よっしゃああ！　行くぞ！！」

扉に向かって駆け出すのだった。

扉は一人と一匹を飲み込むと強く煌き……　その姿を隠した。

章太郎達はまだ知らない……

弟と妹を探すこの旅が多くの人間の運命と交差して、

国――

大陸――

そして、世界の運命を握る事になるとは……　知る由も無かった。

章太郎達が旅立った後の道場……　そこに声が響く。

「――さん！　――さん！　何処だ！？」

男の声。

「主殿！　ここから世界転移の後が見られるぞ！？」

その後に女の声が響く。

「えっ！？　――ちゃんが世界転移の術を！？」

今度は、別に少女の声が聞こえる。

バンッ　と乱暴に道場の戸を開ける男……　その後に続き女と少女が雪崩れ込んでくる。

暗がりで三人の顔は窺えない……　しかし、それぞれ装飾された刀や弓を装備しており、その衣服もこの時代――　いや世界のものとは異なるものであった。

男は道場の中心で何かを調べるが――　すぐ悔しそうに首を振る。

「そんな……」

それを見た少女は顔を手で覆いその場に泣き崩れる……　同時に雲に隠れていた月明かりが少女を照らすとその顔が露になる――

少女は、章太郎の夢に出てきた少女と同じ顔をしており……

「……章太郎ちゃん」

と今までここにいた男の名前を呟くのであった。

（青の騎士）一章　第一節

パチパチと木々が音を立てて燃え盛る中、それとは異なる轟音が当たりに響き渡る。

その轟音が響くと同時に辺りの木々がなぎ倒され、黒い影が弾かれたように飛んでいく。

その黒い影の正体は黒い武者の人型……　しかし、人間ではないだろう。

腹部に裂傷が走り、腕が千切れているのに気にするそぶりを見せないのは果たして人と呼べるのか？　……答えは否。

事実、黒い武者は斬られても血を流すことなく戦っている事から見ても人ではないと言える。

そんな、人形（ひとがた）が数十体、轟音の主にジリジリとにじり寄っていくが……

「っ！！」

鋼が砕かれる音をしながら数体まとめて薙ぎ払われていく。

流石に人形も原型がなくなるまで破壊されれば動きを停止するらしく、辺りを良く見れば動いているものよりもはるかに多く大地に倒れていた。

大地に伏せるその中の一体が立ち上がろうとしたその時――

ゴシャリ鈍い音を立ててと頭を叩き割られる。
頭を潰したのは銀に輝くハルバード。
刃の中心を青い宝玉で飾られたそれは人の手では余るほどの重圧を醸し出していた……　が、重圧の大半はその使い手から発せられていた。
黒の人形が和を思わせるのなら、その使い手は西洋……　重厚な騎士を思わせるものだった。　青の宝玉と同じ色のフルプレートの甲冑で身を固め、背には紋章を記されたマントをはためかせる騎士……　それが先ほどから響く轟音とこの重圧の原因である。
「……」
青の騎士は得物から伝わる手ごたえから息の根を止めたのを確認すると、すぐに他の人形を得物で薙ぎ払おうとするが……
「――っ！？」
力が抜けたようにその場に片膝をついてしまった。
よく見ると騎士の鎧は所々傷が目立っており、なにより肩が激しく上下していた。
己の得物を杖のように突いているところからも騎士の疲労具合が見て取れる。
勿論――　それを見逃す人形ではない。

これを好機と考えたのか青の騎士の背後に一つの黒い影が飛び掛る。

「っ！？」

騎士は殺気を感じ一瞬で反応するのだが……　疲労のあまり身体が動かなかった。

このままでは、武者の刃が騎士の身体に突き立てられるのも時間の問題だろう……

その時だった。

「どいてええええええええええええええ！！？」

涙交じりの怒声が行き成り響いたと思うと。

黒い何かが飛び掛った武者を巻き込み……　そのまま音を上げて木に衝突したのだった。

その光景を見て呆気にとられるながらも騎士は、何が起こったのか確かめるため黒い何かが止まった辺りをまじまじと見る。

そこには……

「大丈夫っすか！！？　って、手が千切れてるぅぅぅぅ！！？」

両手で白いタオルを巻いた頭を抱え、サングラスから滝のような涙を流す黒い何かの正体だろう男が……

「きゅ、救急車！？　救急車ハリィィィィーアァァァァァップゥゥゥゥ！！？」

一人叫んでいたのだった――

……

……

……

（やっ、やっちまった……）

男――　章太郎は酷く混乱していた。

それもそうだろう、自身の運転したバイクで人を撥ねてしまったの

だ……　それも見るからに相手は重傷……

頼りになる相棒は――

「きゅぅ……」

自分の肩で眼を回している。

携帯を使って警察と救急車を呼ぼうにも耳から伝わるのは――

『おかけになった電話番号は――』

という無機質な声だけだったのだ。

「って、ここ異世界だったあああああ！！？」

自分の現状に目の前が真っ暗になった章太郎は――

（どうしてこうなった……）

と数時間前のことを思い出していた。

……

……

……

「ここが、異世界か？　……って寒！？　」

光の扉を抜けた章太郎が呟く……　が、いきなり肌を刺す寒気に身を震わせる。

先ほどまで夏真っ盛りの世界にいた章太郎はいつものタンクトップ姿……　この格好ではいくら章太郎でも、吐く息が白い今の気温では堪えるだろう。

章太郎は寒さに震えながら腰に吊るされた小ぶりのポーチを開く。

そこには何本かのカプセルが詰められており、章太郎はそこから『衣服』と記されたカプセルを取り出した。

そして、カプセルのスイッチを押し光が照射されると……　今まで何も無かったところに鉄製のロッカーが並んでおり、それぞれ『夏物』・『冬物』とかかれた紙が貼り付けてあった。

「上着、上着ぃ～と……」

鼻歌を歌いながら『冬物』ロッカーを開けるとそこから黒いダウンジャケット取り出し着込む。

最初はナイロンの冷たさにビクンと反応しながらも、すぐに羽毛が体温を吸収して温かさを保ってくるのを感じた章太郎は初めて辺り

を見回す。
辺りは枯葉を散らす木、木、木……　なんも変哲も無い冬の森の光景であった。
（意外に普通だな）
霊術なんて未知なものがあるため、もっとファンタジーに満ち溢れていた世界を考えていた章太郎は少し肩透かしをくらいながらも、サングラス越しに冬の夜空を見上げる。
勿論空を見上げても月が二つあるわけでもなく、元いた世界と変わらない月が一つ夜空に浮かんでいた。
「やはり……　不思議なものだなそれは」
ロッカーをカプセルに収納した章太郎の足元からバディの声が届く。
「不思議って……　俺にしてみりゃ霊術の方が不思議で仕方ないけどな。　だけど何で不思議なんだ？　お前って俺の記憶を持っていたんじゃねえの？」
「記憶は確かにあるが、それはお前の記憶であって私のものではない。　その上、私は誕生したばかりだからな……　私にしてみれば眼にするもの全てが新しいものばかりなのだ」
「へぇ～」と言葉を漏らす章太郎を尻目にバディは辺りを見回すと――
「転移は成功したようだな」

と確認するように言う。

確かに、さっきまでいた板張りの道場から夜の森に移動しているのだ転移自体は成功したのだろう……　しかし、章太郎は疑問に思っていたことがあった。

「なぁ、バディ……　聞きたい事があるんだが？」

「どうしたのだ？」

自分の肩に乗る相棒は首をかしげながら応じる――　その仕草は小動物を髣髴させるほど愛くるしく、動物好きの者が見れば一瞬で陥落するほどの威力を放っていた。

（……　こいつの外見のベースになったのって鎧竜だったよな？）

バディを見ながら、以前相対した鎧竜の姿を章太郎は思い浮かべる……　が、あの雄雄しい姿がどうなったらこんな姿になったのか検討がつかなかった。

本人？　に聞けば何かしらわかると思ったが――

（って、違う違う。　聞きたいのはこれじゃなくて……）

軽く首を振り、改めて章太郎は尋ねる。

「寒いし、景色も変わったから転移したのはわかるんだけどよ……ここどこよ？」

その言葉を聞いたバディは一瞬耳をピクリとさせそのまま沈黙する。
前もこのような問答をして、同じような流れになったのを思い出した章太郎。
（あっ、なんか嫌な予感）
こんな事を考えているとバディは沈黙を破り、発した言葉は――
「知らん」
だった。
（やっぱそういう流れなのね……）
ほんの数日前と同じ返答に米神を押さえる章太郎。
「だが、心配しなくていいぞ」
章太郎のそんな姿をよそにバディは告げる。
「？　どゆこと？」
「道場内で力場の調節をしている時にな最初の利用者の霊力……
つまり、お前の兄弟のものだな。　その残照を覚えておいたのだ、
これを追って行けば必然的に目標までたどり着く」
その説明を聞いた章太郎は気の抜けたように「……　まるで警察犬
だな」と口に出す。

しかし、バディは憤慨する様子も見せず逆に「あながち間違いではないな」と肯定の言葉を章太郎に返す。

「いいのかよ、犬と同じ扱いで……」

「今の私の外見は限りなく獣に近いからな……　別にどうと思わん」

「さいですか……」

「まぁ、わかるといっても今は大まかな方向ぐらいだがな……　ふむ、こっちだな――」

何かを感じたのかバディは片手を挙げ、おもむろにピッと方向を示す。

それをみた章太郎は、自分の履く黒のニッカボッカのポケットに手を突っ込みそこから携帯電話を取り出し操作するのだが……

「ありゃ？」

「どうした？」

「いや……　な。　携帯に方位磁石の機能があったから使ってみたんだけど……」

そういって携帯の画面をバディに見せる章太郎。

携帯に映った方位磁石の針はクルクルと回ってその機能を働かせていなかった。

「駄目だなこれは……　普通の奴は無いのか？」
「あると思うんだけど……　探すのが面倒」
「……何故？」
「なんつーか、準備期間って結構短かったじゃん？　だから荷物も結構、大雑把に詰め込んじゃったから……　何処に何があるかわかんねぇ」
「ハッハッハッ」と白いタオルに包まれた頭に片手を添えて笑う章太郎。
それを見たバディは片足を額に当てて溜息を漏らしていた。
「まぁいいじゃん、いいじゃん？　方向はわかってんだから！」
「……　なぜここでバイクを出す？」
「へ？　そっちの方が速く移動できんじゃん？」
「森の中だぞ？」
「ああ～　大丈夫、大丈夫。　こいつならどんな悪路でも走行できる上に故障してもパーツはちゃんと持ってきてるからな。なんとかなるべ！！」
「いや……　普通に危ないだろう？」
注意するバディを気にすることなく、章太郎は『バイク』と書かれ

たカプセルからそれを取り出すと早速跨りエンジンを噴かしていた。

「よっしゃ！　準備は万端！！　待ってろよぉ……　勇馬と安寿！！　兄ちゃんが今行くからな！！」

キラキラと希望に輝きながら章太郎はバディの指差した方向に叫ぶ。

そんな様子を見てバディは一息つき「やれやれ…」といった風に章太郎の肩に飛び乗るのだった――

……

……

……

（ここまでは、ここまでは良かった……　しかし、現実はなんと残酷な事か！）

涙をチョチョぎらせながら頭を抱えその場に蹲る。

（何か音がするからと言ってバイクの速度を上げた結果、大きく張った木の根でタイヤがバウンドし、一瞬宙に浮かんだと思ったら気がついたら人身事故……　俺の馬鹿！！）

「すまねぇ、二人とも……　俺はここまでみたいだ……」

「ヌオオ！」とその場で章太郎は苦悩の声をあげる――　今彼の脳内では法廷で裁かれるところまで進行していたが……

「ここは……　って、馬鹿者！　上を見ろ！！」

「へ？　上？」

眼を覚ましたバディの慌てた声に反応し、間の抜けた様子で顔を上げる……　そこには――

身を固める鎧を半壊させながら刀を振り上げて襲い掛かる武者の姿があった。

「でええええええええええ！？　生きてるぅぅぅ！？　だけどやっぱり怒ってるぅぅぅぅぅ！？　ま、待て！？　話せばわかる！！　今動いたらあんたもやばいんだから！？　そんな物騒なもんしまって！？　もっ、もちつけ！？　じゃなかった、落ち着け！！　人類皆兄弟！　ラブアンドピース！　ラブアンドピィィィスゥゥゥ！！」

「お前が落ち着け！！　っ！？　来るぞ！！」

幽霊とかホラー、オカルト的なものがかなり苦手な章太郎……　自分が轢き殺したと思っていた相手が立ち上がり自分に近づいてきているのだ。

まさにオカルトチックな光景にビビりながら章太郎は意味不明なこ

とを口走り、バディは落ち着かせようと声を張り上げる。

しかし、武者は構うことなく章太郎に近づ――

グシャ！！

くことは出来なかった。

章太郎に襲い掛かろうとしていた武者は、飛来した『何か』にその胴体を破壊されその機能を停止したのだ。

「えっ！？　へっ！？」

章太郎は混乱しながらも武者の残骸と飛来した『何か』――　銀のハルバードとそれを投げた青の騎士を順に見る。

（これ……　人じゃない？）

残骸を見た章太郎はすぐに気付く……　それもそうだろう血も出ない上に中身が空洞なのだアホでも気付く。

（助けてくれたのか？）

次に得物を投げた青の騎士を見る――　が

（後ろ！？）

騎士の後ろに先ほどと同じ黒い武者の人形が近寄っているのを確認したのだ。

「っ！　バディ！！」
章太郎は肩にいる相棒の名前を呼ぶ。
「正気に戻ったか！？」
「応よ！　……あの黒いのは人間じゃないんだな！？」
「ああ、生物の霊力を発していない！　青い方は生物みたいだぞ！」
「オッケー、把握した！！」
「助けに入るのか？」
「当たり前！！」
地面に突き刺さったハルバードを引き抜く章太郎――　それを片手で担ぎ上げると彼は……
「とぉつげきぃぃぃぃ！！」
騎士に飛び掛らんとする黒い武者に向かい走り出すのであった。
一方、章太郎を助けるために得物を手放した騎士は自分に迫り来る凶刃を防ぐ術は無かった。
万全の状態なら得物なしでもこの状況を切り抜ける事が出来たかもしれないが……　数多の数の人形を葬ってきた騎士にはその余力は残されていなかった。

騎士は顔を下げることなく真正面から自分を刺し殺さんとする刃と対面する。

諦めたのか……　騎士の矜持か……

死ぬのなら身体の正面の傷で――　と思われる程の気概を見せる。

だが騎士を嘲笑うかのごとく黒い影は、炎で妖しく照り返す白刃を振り上げ――　その身を宙に舞わした。

その影実に四つ……　本当なら致命傷とも言える四つの斬撃が騎士の鎧に刻み込まれ、その命を散らす予定だった。

しかし、それは……

「とぉつげきぃぃぃぃ！！」

第三者によって予期せぬ結果に終るのだった。

「「「「！？」」」」

感情の無いはずの人形が一瞬それに反応する……

だが思っても無かった。

その一瞬が……

「うぉぉぉぉぉぉ！！」

自分の体と飛び掛っていた他三体の身体を永遠に分断される事にな

るとは……

「……」

吹き飛ばされながらも、武者は光を映さないその眼で第三者の姿を見る。

そこに映ったのは、自分達を屠った巨大なハルバードを振り切った短躯の男が騎士の前で立ちはだかる姿だった――

「おい！　アンタ大丈夫か！？」

男――　章太郎は背中越しに目配せしながら騎士に離しかける。

「……」

騎士は表情こそわからないが一瞬呆けたような間をとった後、章太郎に答える様に首を縦に振った。

「よかった……　目の前で自分の恩人に何かあっちゃあ、気分悪いからな――　ホレ」

顔を半分だけ向けながらニヤリと笑い、章太郎は手に握っていたハルバードを騎士に渡す。

「まぁ、お礼とか聞きたい事が色々あるわけだが……　とりあえず――」

「章太郎、来るぞ！」

バディの声を聞き章太郎が前を向くと先ほどと別の武者が森の陰からワラワラと集合していた。

「恩人の敵は俺の敵って事で――」

「こいつらをぶっ潰してからにするかねぇ！！」そういうと章太郎は頭のタオルを剥ぎ取る。

その代わりにポケットから取り出した黒地に赤文字が書かれた手拭を頭にキツク縛ると――

「よっしゃ……　かかってこいやぁ！！」

黒武者達に向かい咆哮するのだった。

……

……

……

（といったのはいいけど……）

「流石に多いか……」と一人呟く。

武者の数は五十近くまでその数を増やしていた……　そして先ほど章太郎が倒したモノとは明らかに違う身体や得物の大きさも一回り大きく、そのカラーも禍々しい黒と漆塗りの武者の人形がその中に混ざっていた。

（さっきのが足軽とかの下っ端だとしたら、こいつは実質的な指揮官……　徒大将とかかねぇ？）

赤い徒大将――　赤武者は腰の得物を引き抜くとその切っ先を章太郎に突きつける……　すると他の武者が一斉に章太郎に襲い掛かってきた。

「……っ！？」

青の騎士はその光景を見ると戦闘に参加しようと立ち上がろうとするが――

「大丈夫だ！！」

章太郎の声を聞いて動きを止めた。

「こんぐらいだったら何とかなる！　だから、アンタは……」

「そこで休んでな！！」そう言いながら章太郎は迫り来る黒の集団に駆け出していく。

途中切りかかって来た一体の腕を掴むと、章太郎は獰猛に笑い――

「でえええりゃっ！！」

そのまま得物のように他の武者に叩き付けた。
倒れた武者の頭を踏み潰し、再生させないように追い討ちを掛けるのを忘れない。
こうして二体、三体と潰していく章太郎だが――
足元に数本の矢が突き刺さった。
「――っちぃ！！」
飛んできた方向に目を向けるとそこには弓を構えた数体の黒い弓兵の姿があった。
手に持っている黒武者の残骸では投げつけても致命傷を負わせられない、だからと言って放っておくのも面倒ということである。
『あっちの世界』でごたごたに巻き込まれた時も光り物を使う輩に何度か遭遇しており、それによって章太郎に身体に傷が残っていたりする……　といっても章太郎に傷を負わせる人間と言うのは大抵が達人級かそれに近いレベルだったというのをここに記しておこう。
しかし、いくら人間離れしていると言っても章太郎は『人間』……
風邪も引くし、刃物で切られたりしたら血は出るし痛いのだ。
「斬られた時に筋肉に力を入れれば血は止まるけど……　」と本人談ではあるが……
（できる事なら切られたくないし、射られたくないんだよなぁ）

と言うのが本音である。

（近づけば何とかなるけど……）

距離が開いている上他の武者が弓兵を守るようにしているためかなり手間がかかる。

（少し位貰っても仕方ないか？）

そう考えて突撃の姿勢を見せる章太郎……　しかし――

「私に任せて置け」

章太郎に肩にいたバディは言う。

「どうにかなるのか！？」

大上段で切りかかって来た敵の頭を左手で握りつぶしながら章太郎は答える。

「ああ……　見ていろ！」

そういうとバディは一瞬眼を閉じると次の瞬間「カッ」と見開き――

「『鋼の槍』！！」

と言い放つ。

すると弓兵の足元の大地が盛り上がり、そこから鋼色した金属が弓

兵の胴体を一斉に貫いたのだった。

「なんじゃそりゃぁ！？」

戦闘中だが大口を開けて驚く章太郎……　しかし、その手は休むことなく武者に攻撃を加え続けている。

「鎧竜の使う霊術だったらしくてな……　転移の準備中に思い出して使えるようにしておいたのだ」

「ってことは……　元々、鎧竜の技って事？」

「そういうことだ……　まぁ、お前が倒した奴は知性が無かった分霊術が使えなかったみたいだがな？」

「……使えたら確実に死んでるっちゅーんじゃ！！」

「違いない！　……まぁなんにせよ、これで相手が少し遠かろうが心置きなく攻めれると言う事だ！」

「オーケー　……離れた奴は任せた！！」

「応！」

黒の集団を一人と一匹が蹂躙する。

一体は顔を握りつぶされ――

一体は殴り潰され――

一体は胴体に穴を開けられ――

一体は得物代わりにされた拳句、原型がなくなるまで振り回され――

それを繰り返しているうちに黒い影はその数を減らし……　指揮官だろう赤武者だけが残った。

「さて、残るはあいつだけだな？」

手をパンパンと払いながら章太郎は大刀を振り上げて向かってくる赤武者を見る。

重厚そうな外見に反してその動きは俊敏と言ってもいいだろう。

「『鋼の槍』！！」

先手必勝――　バディは走ってくる赤武者へ霊術を放つ。

重い衝突音が轟く。

赤武者は行き成り出てきた障害物に対応できず、腹部を強打した後仰向けに倒れた。

しかし、これで決まったわけではない。

さっきまで黒武者の腹にどてっぱらを開けていた槍は赤武者のそれを貫く事は出来ず、鎧に大きな凹みをつけるだけだった。

「流石に雑魚とは違うようだな」

それを見たバディは呟く。

しかし、その顔はどこか余裕であった。

「それじゃ、後は頼むぞ章太郎？」

「えっ！？　俺！？」

行き成りバディに丸投げされ戸惑う章太郎。

「当たり前だろう？　今の私の最大攻撃でも仕留め切れなかったのだ……　この中で一番の破壊力を持つだろうお前に止めを任せるのが当然だろう」

「……ったく、しょうがねぇ！！　あちらさんもやる気みたいだしな！」

両手で自分の頬を軽く叩き気合を入れ、立ち上がってきた赤武者に視線を向け――

「最初から全力だ、この野郎ぉぉぉ！！」

間合いを詰めて自分の間合い――　『弾丸チャージ』に入れる所までつめる。

幸い、相手も近接武器……　章太郎が間合いに入るにはさほど問題は無かった。

「だりゃ！」

間合いに入ると同時に章太郎は爆発的に加速し、真っ直ぐ赤武者に突撃する。

「……」

赤武者は激しい緩急に対応できず大刀を振りかぶった姿勢のまま――。

「ぶっとべぇぇ！！」

肩から突っ込んできた章太郎に吹き飛ばされる。

その衝撃はバディの『鋼の槍』の比ではなく、先ほどの衝突が軽自動車同士ならこれはまさにダンプカーと軽自動車の激突を思わせるものだった。

いや――　章太郎自身小柄であるため、ダンプカーとは言えない……　見た目は軽だが重量と頑丈さとエンジンがダンプカーといえるだろう。

そんな存在にフルスピードでぶつかった軽自動車はどうなるか？

答えは勿論……　大破　　のはずだが――

「はりゃ？　結構頑丈だねぇ」

赤武者はかろうじて原型を留めていた。

……といっても腹部には亀裂が入り、腕と足はひしゃげ、得物の大刀も半ばから折れてしまっている状態である。

対する章太郎はピンピンしており、取り出した煙草に火をつける程の余裕を見せていた。

「気を抜くな章太郎！！」

そんな章太郎にバディは叱責を飛ばす。

「ああ～　すまん、残心……　というより――」

「とどめ忘れてたわ」そう言って章太郎は煙草を咥えたまま、赤武者に近づくとその腕を取り――

「ちぇりゃあ！！」

その場で一回転二回転し遠心力をつけると赤武者を上へ投げ飛ばした。

上に飛ばされた赤武者はある程度まで行く引力に従い、物凄い速度で地面に近づいていく。

このまま叩きつけられれば赤武者も唯ではすまない――　しかし、章太郎の攻撃はまだ終っていなかった。

「いくぞぉぉぉ……」

一撃必殺の右を腰溜めに引くと章太郎は大地を蹴り、落下してくる赤武者を向かえるように加速すると――

「打ち抜けえええええ！！」

右拳を突き上げた。

落下の力と迎える力……　そして章太郎の馬鹿力で最高潮まで高まった破壊力を持つ右拳は、赤武者の鎧を轟音と共に砕いていく……

『ミサイルアッパー』その姿が迎撃ミサイルの用であったため、あっちの世界で誰かが名づけたのだ……　章太郎は顔を真っ赤にして否定する。

「必殺技とか名前とか……　背中が痒い！！」というのも本人談。

本来ならこの技……　軍用スーツ等の耐久力が高い相手に放つものである。

勿論、相手は人間であるため手加減しないとかなり危ないのだが……　幸い今の相手は人形――　その上、白姫に負けたフラストレーションが溜まっていた章太郎はフルパワーで叩きつける。

哀れ赤武者は原型を完全に無くし……　唯の鉄屑になってしまったのである。

「よし！　俺、絶好調ぉぉ！！」

「どうだコンチクショオオ！！」とガッツポーズを決める……

と――

「まだまだ余裕、余裕ぅ！！　後三体ぐらい出てきても問題ないぜぇぇ！！」

と余計な事を口走ったのだった。

「馬鹿者！！　今そんなこと言った――」

バディが章太郎を何かに気付き叱責しようとするが……

バサバサという茂みの音で遮られる。

その音にビクっと反応すると章太郎はゆっくり其方を見る――

そこには――　今倒した赤武者と同系統の武者が5体居たのだった。

おまけに……　さっきよりも明らかに多い黒武者達を引き連れてである。

「え～と……　ごめん、フラグ立ててた？」

「ダンタイサンイラッシャ～イ」と頬を引きつかせながら章太郎はバディに話しかける。

「フラグというものはよくわからんが……　あれだな、お約束という奴だな」

「デスヨネー」（うわ～　めんどくせぇ事になってきた……　倒せない事は無いけど一気に来られたら流石に一撃ぐらいもらっちまうか？）

内心こんな事を考えながらも「やるしかないな」と章太郎は気合を入れなおし攻撃の準備にかかる。

だが――

「……」

その肩を青い鎧を纏った手が引き止める。

「あっ、アンタ……　大丈夫なのか？」

いつの間にか騎士がそこに居たのだ。

回復したのか激しかった肩の動きは緩くなっていたのだ……

「でもアンタ動ける状態じゃ……　あれ？」

章太郎が何かに気付く。

それもそうだろう、あれだけ傷ついていた騎士の鎧が現在進行形で修復していってるのだ。

（……　これも霊術って奴か？）

そう考える章太郎に騎士は指を三本立てる……

「指？」

「いや、三分程持たせろと言う意味だろう」

章太郎は「？」を浮かべるがバディは意味を解したのか章太郎に伝える。

騎士は一回頷くと得物のハルバートを構えて集中し始める。

「そうか……　章太郎！」

「え？　何！？」

「騎士殿が大技を放つからそれまでこの場を守る！！　いいな！？」

「っ！　おっおう！！」

よく見ると騎士の周りに青い霊力が集まっており非常に強い力を放っていた、赤武者達もそれに気付き騎士に襲い掛かろうとするが――

「おっと、やらせんよぉ！！」

章太郎に阻まれるのであった。

……

……

……

（なぁバディ！？）

（どうした！？）

（あの騎士さん？　大技使うって言ってたけど霊術なら結構厳しいんじゃないの！？）

（そうだな、騎士殿の纏っているのは『水』の霊力……　辺りが炎と木々に包まれたこの力場ではかなり分が悪い……　だが）

（だが？）

（あの騎士殿……　かなり強い霊力を発している。　本人の素質と力量も高いが、何より宝珠の質がかなり高いものだと見た――　章太郎、左から来たぞ！！）

「あぶねっ！？」と左からの斬撃を前転することで回避し、お返しと言わんばかりに手ごろな黒武者の足を握りその身体を斬撃の主に叩き付ける。

（んじゃ、この状況どうにかなるのか！？）

（さぁな、後数十秒経てばわかるだろう。　まぁ状況は好転出来るだろうと思うが……）

（そうか……　ならもう少し頑張りますかね！！）

敵の攻撃を裁きながら念話で話しかける二人……　さっきの黒武者の時と異なり口を開いている暇が無いための念話である。

たかが三分、されど三分……　今の章太郎たちにとってはこの三分

が長く感じていたに違いない。

先ほどの戦闘と異なり武者達は、自分達だけではなく騎士の方にも向かっていくのだ……　後ろに向かわせないために前線を張る章太郎達の肉体と精神の疲労は蓄積していく。

流石の章太郎も少しばかり疲労を感じているのか額を汗で輝かせていた。

といっても、ものの三分足らずで黒武者を半数以上、赤武者達を撃破とは言わないがそれぞれ鎧に亀裂を負わせているのは流石だろう。

一方、騎士はその身に多大な霊力を溜め込んでいた。

最初は微弱だった青い光も今は強い色を放ち鎧やハルバートに纏っている。

騎士は今集中していた――

自分の命がかかっているのもあるが、その上目の前で自分を守る男の命も自分の双肩に乗っているのだ。

絶対に切り抜ける。

その思いに同調したのか、ハルバートの宝珠が一際強い輝きを放つと――

「……！！」

その身に纏った霊力を輝かせるのであった。

「っ！？、　章太郎準備が出来たみたいだ下がるぞ！！」

「応！！」

霊力の煌きを感じたバディは章太郎に伝えると二人はそのまま騎士の後ろまで下がる。

その後を追いかけて武者達も後に続く……　が時は既に遅かった。

「よし……　んじゃ後は任せた！！」

騎士の後方に移動した章太郎がその後姿に声をかける。

その声がトリガーになったのか、騎士は内包した霊力を一気に解放すると同時にハルバートを高く振り上げる。

一気に開放された霊力は一瞬霧散したかのようにみえたがすぐにある一点――　ハルバートの刃の中心である宝珠に集まっていくと、宝珠の青い輝きが一層強くなる。

まるでブラックホールに吸われていくように集まる霊力を吸収する度、宝珠の光は増していきそれがピークに達した時――

「『Ｍａｓｃａｒｅｔ』！！」

声と共にハルバートを振り下ろした。

（今、声が……　ってなんじゃこらあああああ！？）

一瞬聞こえた声に反応しても、章太郎はすぐ目の前に広がる光景に心の中で叫びを上げる。

ハルバードが振り下ろされた瞬間溜められた霊力が水に変換され武者達に襲い掛かったのである。

……　問題はその規模である。

鉄砲水といってもまだ足りない波濤が武者だけでなく、前方で燃え盛っていた木々全てを飲み込み、押しつぶしてしまったのだ。

騎士の前方を見渡せば水に濡れた大地と根元から折れた木、そして元は武者だったろう残骸が広がっていたのだった。

「マジ、パネェ……」

目の前で起きた光景に呆然としながら章太郎は呟く――　が

「……」

無言のまま地に倒れる騎士の姿が眼に入ると慌てて近づくのであった。

「ちょっ、大丈夫か！？」

そう言って章太郎は騎士を仰向けにして上体を起こし兜の口元に耳を寄せる。

（呼吸は……　してる――　が……）

呼吸音を確認してもどこと無く苦しそうに見えた章太郎は、少しでも楽になるようにと騎士の纏っている鎧を外そうとするのだが……

（……止め具が無い！？）

その場で「？」と「！」を浮かべる章太郎。

頭の中では緊急時の病人の対応の手順を思い返しているのだが、流石に鎧を着た人間の応急処置方法なんてあるわけが無い。

「バディ！　どうにかならんか！？」

自分の手に負えないと思った章太郎は肩にいるバディに切羽詰ったように尋ねる。

それを聞いたバディは「少し見せてみろ」と言うと騎士の様子を診はじめる。

「とりあえず鎧だけでも脱がしてやりたいんだけど……　止め具が無くて――」

「止め具が無いのは仕方ない。　これは霊力で編まれたものだからな、これを解除するには本人の意思か霊力切れを待つのが一番だな。　というより今の騎士殿が霊力切れで気絶しているのだ」

「時間が経てば解除されるだろう」バディがそう言い終えると騎士の身体が淡く光り始めると一瞬で鎧がその姿を消した。

「ブッ！！？」

章太郎は鎧の主を見て噴出す――　何故かと言うと。

「おっ、おおお――　おんなぁ！？」

騎士が横たわっていた場所には女性がいたのだ――　健康的に見える小麦色の肌、少しウェーブのかかった流れるような紫銀の髪、スラリとした長い手足に瞼は閉じられているが凛々しい印象の目元を始めた整った顔立ち……

それらを総合すると彼女はとんでもない美人と言えるだろう。

「あわわわわわ……」

目の前の美女を見て顔を赤くさせながらうろたえる章太郎。

何故かと言うと……　彼女の格好である。

スラリとした手足どころか、キュッと締まったウェストにヒップ、そして彼女が女性である事を示す巨大と言ってもいいバスト――それらの大部分が章太郎の眼で確認できるのだ。

勿論、きわどい所は青い布らしきもので隠れているのだが……

（なんやねん！　このエロ水着は！？）

という章太郎の思考のように、先ほどの重厚な鎧とは真逆の装備なのであった。

（おっ、俺にどうしろと！？　というよりこの図を誰かに見られたら今度こそ警察行きだろ！？）

女性と言う点だけでも章太郎の余裕は無くなると言うのに、彼女の格好がそれに拍車をかけていた。

（とっ、とりあえず俺のジャケットを……）

自分の着ていたジャケットを脱いで女性に着させようとして、彼女を抱き起こそうとするがピタリとその動きを止めてしまう。

（さっ、触れない……）

別に章太郎は潔癖症と言うわけではない――　唯、「半裸の女性に素手で自分が触れていいのか？」と思ってしまったのだ。

（いや！　これは人助け……　だから仕方が無い！！）

しかし、今は緊急事態……　女性の救護と自身の名誉がかかっていると自分に言い聞かすと、章太郎は彼女の背に手を入れそっと抱き寄せる――　のだが……

「なっ！？」

その振動で女性の母性がたわわに揺れるのを確認してしまったのだ……　こうなっては、初心（ドウテイ）の章太郎には荷が重すぎた。

頭に湯気が立ち上りそうなほど顔を赤らめると――

「……」

章太郎は考えるのをやめ……　るわけにもいかず。

「バディ……」

「どうしたのだ？」

「……　俺の代わりに服を着させてやってくれんか？」

傍らにいる相棒に服を着せるのを手伝って貰うのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0475w/

クラッシュ！！

2011年11月23日23時45分発行